関山

かんざん

第25号

寺報　中尊寺

目次

寺報　グラビア
「与楽　抜苦与楽　普皆平等」　貫首　山田　俊和　書　5
中尊寺貫首退任を前にして
抜苦与楽　普皆平等　貫首　山田　俊和　6
「法の場」をつくる
～諸仏摩頂の空間を目指して～　菅原　光聴　18
第五十八回　平泉芭蕉祭全国俳句大会
特別講演
「十七音の旅」　櫂　未知子　21
風信／語録
「一番残るのは、人間の言葉です」　佐々木邦世　38
大館の人　破石　晋照　40
〈緊急の提言〉
平安時代でただ一つ、
平泉「伝教大師石像」の保護を岩手県に望む
――謎の大師石像のルーツを追う――　菅野　成寛　42
黄金花咲くみちのく
東京 富岡八幡宮の神饌田　抜穂祭　荻山　義浩　55
近代的大型国語辞典『大日本国語辞典』の刊行
――大槻文彦著『言海』との関わり――　高森　良文　58
関山植物誌〈10〉　破石　晋照　63
〈報告〉光勝院竣工　菅野　澄円　64
清水広元さんのこと　66
〔福聚教会・中尊寺支部便り〕
祝いの年　三浦みゆき　68
新刊紹介　70
一枚の写真から〈2〉　北嶺　澄照　73
関山句嚢・歌籠　74
御神事能番組　82
陸奥教区宗務所報　84
執務日誌抄　88
御奉納者　御芳名　99
浄財御奉納者　御芳名　99
不動尊篤信御奉納者　御芳名　100
〈表紙〉光勝院御本尊開眼法要
令和元年十月二十七日

国宝 紺紙金字一切経 大般若経巻第百十三（見返絵）

表千家同門会全国大会 中尊寺光勝院法要（令和元年11月7日）
東日本大震災復興祈念の岩手大会。光勝院で法要が営まれ、茶会が開催された。

一字金輪仏頂尊御法楽（令和２年１月８日）

平泉総社神輿渡御（7月14日）

紅葉銀河（10月26日～11月10日）

国宝中尊寺金色堂保存環境調査専門委員会（平成31年2月19日）

与楽「抜苦与楽　普皆平等」、『中尊寺建立供養願文』より。

貫首　揮毫

能「秀衡」（11月３日）

佐々木祐輔さん全国大会出場

積善院法嗣の祐輔さんが全国高校ラグビーフットボール大会に出場した。写真は練習の際のもの。

令和初日の中尊寺（５月１日）

改元記念の1,000枚限定の御朱印を頒布。早朝から長蛇の列ができた。

中尊寺貫首退任を前にして

抜苦与楽　普皆平等

中尊寺貫首　山田俊和

私は、平成十八年十月に、天台宗東北大本山関山中尊寺住職（貫首）を拝命し、以来十三年余りが経過致しました。今般、令和二年四月末日をもって退任させて頂くことになりました。

この間、仏天のご加護、中尊寺一山大衆の皆様はもとより、檀信徒、関係各位のご指導ご鞭撻を賜り、法務を勤めて参りました。ここに皆々様に深く感謝し、心より御礼申し上げます。

在任中には次のような事がありました。即ち主なることは、

平成二十年六月十四日＝岩手・宮城内陸地震。
平成二十三年三月十一日＝東日本大震災。
平成二十三年六月二十九日＝世界文化遺産登録。
平成二十五年三月二十四日＝本堂本尊丈六釈迦如来像奉安。

平成二十八年六月二十六日、平成三十年九月三十日＝如意輪講式厳修。
平成三十年四月三十日＝国宝金色堂大修理五十年記念シンポジウム。
令和二年四月十九日＝光勝院建設落慶式（予定）

と、どれも心に残る事がありました。また、秘仏一字金輪仏頂尊のご開帳が二度ありました。

御修法に参勤

中尊寺貫首の勤めとして、天台宗総本山比叡山延暦寺御修法に、今年を加えれば六度の参勤を致したことになります。

御修法とは、毎年四月四日から十一日まで、延暦寺根本中堂で厳修されます。天皇陛下の御衣を加持し、世界平和、国家安穏、玉体安泰、万民豊楽を祈念する延暦寺最高の大法会です。天台座主猊下を大阿闍梨に、各門跡門主と諸大徳十七人によって奉修されます。

この御修法は、桓武天皇の御願により、円澄が、延暦二十四年（八〇五）に、宮中紫宸殿にて、「五仏頂法」を修したのが始まりです。その後、明治時代に一時中断しますが、大正十年（一九二一）に再興されました。現在では、「熾盛光法・七仏薬師法・普賢延命法・鎮将夜叉法」の四大法が順次奉修されています。御修法参勤者に指名されることは誠にありがたいことです。二年続けて毛越寺藤里明久貫主と参勤できますこと、大変ありがたく、名誉なことと存じております。

百万遍念仏修行を奉修す

平泉の世界遺産登録を目指していた頃、清衡公月忌の平成二十年七月十七日から一年間で、百万遍念仏修行の発願を致しました。平泉の浄土を体現するには、この念仏修行がふさわしいと考えたからです。しかしながら、一日三千遍のお念仏を申すことは、とてもとても大変でした。日々法務があるからです。一年を少し越えましたが、なんとか結願を迎えられました。

一隅を照らす運動副会長をつとめる

平成二十五年より今日まで副会長を勤めさせて頂きました。この運動は、令和元年に発足五十周年を迎えました。運動の主旨は、伝教大師のご精神を現代に生かそうです。道心有る人となり、どこにいても光り輝く存在になりましょうということです。私達は、生きとし生けるもののおかげで、この世で光り輝く存在になります。従って、自分自身は常に感謝の心をもって、自分以外の生きとし生けるものが、光り輝く存在になるよう協力しなければなりません。その功徳で、自分が光り輝くということを知らなければなりません。

天台宗海外寺院支援について

私は、天台宗海外伝道事業団理事長として、ハワイ、ニューヨークの天台宗別院の活動を支援して

参りました。

天台宗ハワイ別院は、約五十年前、アメリカハワイ州ホノルル市ジャクレーンに、天台宗徒の協力のもと開創されました。天台宗の海外開教の始まりです。荒了寛師が初代住職で、師の独特な開教はハワイで注目を集め、大きな成果をあげました。しかし、平成三十年一月にご遷化され、二代住職荒了周法尼も十一月に突然遷化され、現在、後任住職選定、護持計画策定に努力しています。

天台宗ニューヨーク別院は、今から十五年前、アメリカ・ニューヨーク州ケイナンに創建されました。住職はアメリカ人の聞真ポールネイモン師、奥様は珠聞さんです。お二人は、日本にて、泉倉寺一島正真師のもとで天台宗を学び、ニューヨークを拠点として、各地に支部を育てられ、活発な布教活動を展開されています。信徒は全てアメリカ人で、法華経、法華懺法、例時作法等は英語にてお勤めし、止観も見事なものです。私達が学ぶべき点が多々あります。

日中友好の絆

民間の最も古い中国との友好団体の日中友好宗教者懇話会に、私は、平成十三年から関係し、事務局長、理事長を経て、昨年より会長を勤めております。

かつて太平洋戦争時に、日本は労働者不足を補うため、中国より約四万人を強制連行し、そのうち約四千人が苛酷な労働のため命を失ったと言われています。その遺骨は粗末に扱われ、昭和二十四年

秋田県大館市花岡にて、遺骨散乱が発見されました。仏教会は、中国人俘虜殉難者慰霊実行委員会を設立し、殉難者の調査、遺骨収集、慰霊、送還の大事業を行いました。遺骨送還は九回行われ、約三千二百柱が中国天津市に送還されました。現在、その遺骨は天津市抗日烈士廟に、そのまま奉安されています。

この遺骨慰霊実行委員会の解散に際して、昭和四十二年日中友好宗教者懇話会が設立されました。昭和四十年、天台宗の即真周湛天台座主を団長とする、天台山訪問は宗懇の世話によるものです。

秋田県大館市花岡十瀬野公園墓地には、中国殉難烈士慰霊の碑が、昭和三十八年に建立されました。供養は花岡の信正寺により回向が続けられております。私は折に触れて回向に出向いております。

錦神社、西木戸神社の参拝

私達が決して忘れてはならない所があります。それは奥州藤原氏終焉の地、現大館市二井田の錦神社と、現比内町八木橋の西木戸神社です。

泰衡公は、贄（にえ）の柵（さく）（現大館市二井田）にて、文治五年（一一八九）九月三日に落命し、平泉の時代が終ります。泰衡の尊体は里人によって、錦の直垂（ひたたれ）に丁重に包まれて埋葬され、錦神社となりました。毎年九月三日には人々が集い、盛大なお祭りが催されています。

西木戸神社は、錦神社の近くにあります。泰衡公の夫人は、泰衡を追って八木橋に着いた時、泰衡がすでに討たれ死したことを知り、三人の子と共に自害を遂げました。里人はその死を憐れみ、祠を建立し、五輪塔を建て供養したのが西木戸神社です。近隣の人々により、八百年にわたり供養されています。

錦神社、西木戸神社の参拝回向は、中尊寺として欠かしてはならないものです。私は、二社を参拝し、花岡十瀬野公園墓地に行くのを常としました。私にとって大館は忘れられない地です。

抜苦与楽　普皆平等

中尊寺建立供養願文にある、「抜苦与楽　普皆平等」は、中尊寺建立の精神です。その意は、すべての生きとし生けるものの苦を取り除き、平等に楽を与えたいというもので、釈尊のお悟りの心、慈悲を示しています。

私達は、この世に両親を一番身近の縁として、神仏の計らいにより誕生します。そして、自然の恵みの中で、他人の協力を得て、生かされて生きています。従って、人は、両親と神仏により、自分以外の生きとし生けるものを生かすために働きなさいと、この世に送り出されたのです。日々利他の行に励む、忘己利他です。その功徳により、私達は生きているのです。ひとつの命は、この世に存在する全ての命なのです。その尊い命、存在を己にも、他人にも認め、あやまちを宥（ゆる）し合うことによって、浄土が顕在するのです。

中尊寺を護持してこられた方々は、自らの信心を深め、学び、修行し、ご参拝下さる方々に接して参りました。その伝統は、必ずや継承されると信じております。

令和二年四月十九日の、光勝院落慶式を目前に、本尊釈迦、弥陀、薬師の三尊の各二十一ヶ座本尊供修行を致しております。無事満行して落慶式を迎えたいと思っております。

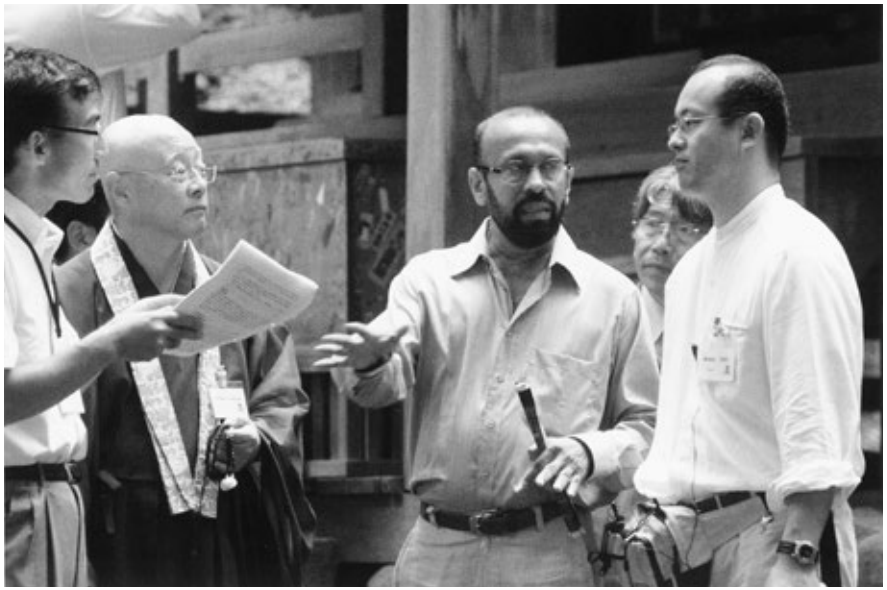
平泉の浄土実現には、中尊寺・毛越寺両山の努力が何よりも大切です。両山は一層交流を深め、協力し合って各寺の発展に尽すことが大切です。この混沌たる世界にあって、光り輝く中尊寺、毛越寺と成り、世界の平和、日本の繁栄、人類の幸福のため貢献されますよう念願致します。

重ねて、貫首在任中のご法助に深く感謝申しあげます。

山田貫首は秋田県大館をたびたび訪問されていた

西木戸神社にて読経（平成29年8月26日）

錦神社にて（令和元年9月8日）



世界文化遺産登録へ、イコモス現地調査（平成19年8月27日）
ユネスコの諮問機関イコモス（国際記念物遺跡会議）の一行が訪れた。

深川富岡八幡例大祭水掛神輿渡御（平成20年8月17日）
平泉の水掛神輿が富岡八幡例大祭に参加。この例大祭において、余処の神輿の参加が認められたのは史上初のことだった。

東日本大震災四十九日忌回向に陸前高田市へ出向（平成23年4月28日）

キャロライン・ケネディ
駐日米国大使来山
（平成25年11月26日）

東日本大震災慰霊供養之塔 開眼法要（平成29年3月6日）

横手市子ども歌舞伎のみなさんと（平成30年10月28日）

850年ぶりに『如意輪講式』法要を厳修（平成28年6月26日）

戦後70年目の8月15日、本堂前にて平和合作画制作

「法の場」をつくる
～諸仏摩頂の空間を目指して～

菅原光聴

中尊寺では平成三十年（二〇一八）より、約一二〇畳の仏堂と行催事用大広間を併設した「光勝院」の建設に着工し、昨秋には本体工事が竣工して今春四月の落慶を俟つばかりとなっております。施設の建設ならびに光勝院本尊造立にお力添えいただきましたすべての皆さまに心より御礼申し上げます。

仏事が行われる空間のことを「法ノ場」と申します。寺の空間「場～ニワ～」が持っている空気と、寺をお参りされる方の心がお互いに感応した時、ありがたいご縁を感じて頂けるのではないでしょうか。中尊寺におきましても、光勝院を新たな「場」として、坐禅・写経等の修養道場、先祖供養の回向道場、さらには文化行事や各種研修会、仏前結婚式など多彩な目的で活用し、多くの皆さまが仏教や平泉文化に触れることのできる空間にしてまいりたいと考えております。また、本堂は今まで以上にご参拝の皆さまに堂内にお入りいただいて本尊丈六釈迦如来にゆっくりご参拝いただける機会を増やすことができるようになります。

光勝院仏堂は本堂旧本尊阿弥陀如来に加え、釈迦如来と薬師如来を新造し、三尊並坐のご本尊といたしました。これは奥州藤原三代公が平泉に造立した中尊寺（釈迦如来）、毛越寺（薬師如来）、無量光院（阿弥陀如来）のご本尊に倣ったもので、三世（過去世・現世・未来世）の衆生（生あるもの）を浄土へ導くために「界内の仏土」（迷いの世界である三界＝欲界・色界・無色界の中にある浄土）を平泉に現出させようとした藤原氏の願意にあらためて立ち帰るためです。

さて、昨年は新天皇陛下のご即位により「令和」時代が幕開けとなり、スポーツではラグビーワールドカップ日本大会で熱戦が繰り広げられるなど明るい話題で盛り上がりをみせました。しかしその一方で地球環境問題や様々な国際紛争から、身近な日常生活においても貧困や生きづらさなど数多の問題が顕在化してきている様に思われます。こうした世相は、自他を乖離させて自分中心の尺度でものごとを考え、多様性を排除して一義的に歪められた正しさで世の中を見る風潮が顕著になってきていることに起因するように思われてなりません。今必要とされるのは、自分と他人、自分と周りの環境との関係性を導き、多様でありながら一つに包含されている本来の世の中のありようを照らす智恵や教えなのではないでしょうか。

今年七月には東京オリンピックが開催されます。その大会運営の原動力となる理念として「ダイバーシティ（多様性）とインクルージョン（包摂）」（多様性や違いを尊重し異なる価値観や能力を活かし合う）という言葉があげられているそうです。この言葉は、藤原清衡公による中尊寺建立供養願文に述べられた「普皆平等」・「諸仏摩頂の場」（諸仏によってすべての生命が平等に迎え入れられ、頭を撫でて頂けるような場所）の精神にも通じ、今の時代を照らしてゆくためのキーワードとなり得ると思うのです。

九百年前、藤原清衡公はまず関山に一基の塔を建て、『法華経』の教えに則って境内の中央に釈迦・多宝如来の並座する多宝寺と百余体の釈迦如来を安置した釈迦堂を建立しました。そして密教の諸尊を安置した両界堂、三丈（身丈約九メートル）の本尊阿弥陀如来と九體の丈六（身丈約四・八メートル）阿弥陀如来を安置した二階大堂や、極楽浄土の荘厳を体現した金色堂を建立し、亡くなる二年前の大治元年（一一二六）には丈六釈迦三尊を本尊とした「鎮護国家大伽藍一区」の落慶供養が執り行われました。清衡公が造営した中尊寺伽藍は宗祖伝教大師、開山慈覚大師と受け継がれた「法華経」の平等思想に密教や浄土教など多様な教えを摂り込んだ天台仏教に基づくものであることは言うまでもありません。藤原氏と蝦夷という異なる出自を持つ父母の間に生まれた清衡公は、戦乱で亡くなった敵・味方、人や動物の霊魂を平等に浄土に導かんと中尊寺伽藍を建立しました。そして「諸仏摩頂の場」を標榜し、生い立ちの違いを越えすべての生命が受容される仏土を現世にあらわそうとしたのです。

中尊寺は、令和三年（二〇二一）に宗祖伝教大師一千二百年大遠忌と、「平泉」世界文化遺産登録十周年、同六年（二〇二四）には金色堂建立九百年、同八年（二〇二六）には中尊寺落慶供養九百年、さらに同十年（二〇二八）に

は大檀主藤原清衡公の九百年御遠忌と、大きな節目の年をいくつも控えております。

本堂では伝教大師が灯して以来一二〇〇年の時を照らす「不滅の法灯」にお参りいただくことができます。光勝院では坐禅や写経、先祖供養や様々な行催事などより深く仏教に触れる体験をしていただくことができるようになります。多くの皆さまが心に「法のともしび」を灯し、「諸仏摩頂の場」の寺風を感じていただければ幸いです。

中尊寺といたしましても本堂と隣接する光勝院の道場・施設を多彩に活用し、過去のご先祖さまから現在の私たち、そして未来の子孫にいたるまで、多くの皆さまが仏さまのご加護をうけて幸せを感じることのできる場にしてまいりたいと、決意を新たにいたしておるところです。

（執事長）

中尊寺の寺域（空中写真）

第五十八回平泉芭蕉祭全国俳句大会　特別講演

「十七音の旅」

講師　櫂　未知子　先生

どうも皆様、櫂未知子でございます。ただいまご紹介をいただいたのですが「銀化」という結社、そこで創刊者、中原道夫とともに…。いや、そうではなく、私は単なる一同人でございます。

現在は「群青」という同人誌を発行しております。佐藤郁良という、文法で有名な俳人さん、開成高校の教諭で、俳句甲子園に十九回連続出場で優勝十回という、その俳句部を率いている若い方と一緒に「群青」という同人誌の共同代表をしております。

私は、北海道余市郡余市町の出身でございます。余市といえば且つてのスキーのジャンプ、日の丸飛行隊といわれた札幌オリンピックの時、表彰台に上ったジャンプの選手の出身地です。あの頃ジャンプは非常に盛んでした。ニッカウヰスキーが元気だった頃のことです。笠谷幸生は余市郡仁木町の出身です。七十メートル級ジャンプで、金メダルを獲得されました。もう一人有名な方、といえば宇宙飛行士の毛利衛さん、同じく余市町出身ですね。以前、俳句番組でお会いしたことがありましたけれども、とても上品で、素敵でノーブルな方でいらっしゃいました。そしてもう一人、余市出身というとこの私です。

その余市は豪雪地帯で、父がもともと東京出身でして。なんと、無謀にもあの余市から車で確か東京に行く用事があって、その途中でこの平泉に立ち寄りました。当時十四歳、何にも覚えていません。記憶らしい記憶が何もなさ過ぎて、今回来てこういう町だったのだと——。ずいぶんおしゃれな駅舎だなあ、こんなに綺麗なのかと。尚且つ、昨日、中尊寺に行って見ました。金色堂が金色まばゆいのに、そして境内が非常に広く大きいことに驚きました。

毛越寺本堂にて講演

今日は、対応してくださっている岩渕さんに、この毛越寺をガイドしてもらいました。本当に見事なガイドぶりで（笑）。色んなお寺を訪ねていますけれど、たぶん今まで見た中で、この境内が一番美しいのではないかと……、亀がいて、緑がとても綺麗で、とても上品ですね、繊細ですし。私ちょっと驚きまして、世界遺産になったから多少は浮ついた雰囲気があるのかなと思っていましたら、全然違っていまして。庭園を見て歩いて、ああ、きっとこういう句が生まれそうね、と言いながら、とても楽しかったです。

今回のテーマというのが、必ずしも芭蕉のことを話さなくても良いと言われておりましたので、非常に大まかなタイトルにしていますが「十七音の旅」ということにしました。平泉が世界文化遺産になったのには、もちろん芭蕉が大いに寄与しているのでしょうと密かに思っている次第であります。

先程、毛越寺さんに、芭蕉おみくじというのがありました。七百円の筆ペンもありました。皆さんぜひお買い求めください。名句が生まれるかも知れません。

実はおみくじを引くのが趣味で、引いては学問のところを見ます。学問を俳句に置き換えて。そうしたら全体運としては大吉だったのですが、学問のところは「難しいです」と書かれていました。「さらに勉強をすることです」と書いてありまして。結構がっくりしたのですが、結ばないで持って帰ります。

とにかく十七音を無駄にしないことによって、俳句が旅へ誘うこと、旅が俳句へと誘うこと、いずれにしても、各地で詠まれたいろいろな名句と呼ばれるものを、少し読み返していきたいと思います。

例えば、私の故郷の北海道で生まれた名句があります。この方のことを記憶している方は少ないかもしれません。細谷源二という方です。東京から昭和二十年に十勝に入植しました。十勝っていったい何処なのよ、と思われるかもしれませんが…。非常に奥深く、雪深く、そして寒い。さらに夏は暑いという大変な気候の場所でございます。それで、彼は夢を抱いて入植したのだけれども、そこは実は農業に適さない泥炭地でした。

地の涯に倖せありと来しが雪

細谷　源二

この句を初めて読んだときに、私は「分かるこの感じ」と思いました。私も子供の頃は、向こうに幸せがあるはずなのだけれども、という感じだったですね。

つまり旅人としてではなく、定住者として来たのだけれども、この地に倖せなどあるのであろうか。嘆いているわけではないけれども「来しが」といったあとに「雪」とおいたことによって一種の絶望感、楽園を失ったという感じですね。それが句に出ている。そうじゃないかなと思って、これはやはり雪の名句だなと思っております。

以前、青森の地吹雪ツアーに行かないかと言われたことがありまして。きっぱり断りましたね。何で私があんなところに行かなきゃいけないの？

地吹雪なんてさんざん経験しているのに。面白いから行こうよ、と言われてですね、それから二、三回誘われて断ったのですが、ところが、たぶん青森の方が書いたエッセイになぜか私が行ったことになっていました。その時私は行かなかったのです。そんなことを思い出します。

それから、レジュメに全然雰囲気の違う句が書いてあります。これは旅人としての視点といいましょうか、

蕎麦咲けば祭り支度の十勝びと

大島　民郎

十勝というのは小豆ですとか、そのほか色々作物の採れるところでございます。普通ですと「祭り」というと夏の季語になってしまうようですが、この場合は「蕎麦の花」なので、これは秋、たぶん収穫の時期、秋祭りの支度をしている感じではないかと思いますね。北海道の冬は早いので、八月のお盆の頃には、私の郷里の人たちは今年の雪予報をします。気が早くてお盆の頃から話している。それに対してこちらは、そろそろもう短い秋が終わってしまうので、とにかく収穫に向けて祭りを企画しようという、何だかおおらかさで明るい感じを受けられるのではないかな、と私は思いました。

次は非常にまた美しい句で、これは完全に旅人としての視点なのですが、絵葉書俳句になっていないところがとても良いなと思ったわけですね。これは阿寒湖ですね。

夕焼は湖の毬藻にとどかんか

加藤　楸邨

断定しているわけではない。見えないから、たぶん、この美しい光が届くのではないか、という素敵な句だと思います。楸邨もこういう句を残されていたのだなと思います。

それから津田清子さんですね。これは季語としては若干、不完全なんですが、津田さんは無季も作られましたので、これでいいと思います。これは実際には海霧（うみぎり）についての霧笛なのですね。これは夏の霧です。

霧笛が呼ぶ国後（くなしり）島よ択捉（えとろふ）よ

津田　清子

仙田洋子さんの句、昆布刈る、昆布を干すというのは夏の季語になります。

国後を遥かに昆布干しにけり

仙田　洋子

国後島は、北海道の本土からはっきり見えます。返してもらえないものですから、旅人としてはやはり、あれはどうなっているのかなという感じがあったのではないかと思います。見えているのに実体がつかめないという所なのですね。

私が子供の頃には、北海道らしい看板がありまして、「呼び戻そう父祖の築いた北方領土」。今はその看板が無いのです。何故だかよくわかりませんが。

今井杏太郎の句、これは、はっきりいって氷が漂流しかかった季語というか、そういう感じなんですね。

知床（しれとこ）の海を流るる氷かな

今井杏太郎

つまり「氷」だけだと冬の季語になるのですね。ここが「流れた」となりますと、やはり何ていったらいいでしょうか、春が動き出しそうな流氷という、そういうことなのです。知床も世界自然遺産になっていますので、行かれた方もいらっしゃると思いますが、私は、昨年から流氷を見に行きましょうと誘われているのですけれども、さっきの地吹雪と同じで、何で私が寒い所へ行かなきゃいけないの、とすべて断っているのです。

それから大野林火の「昆布の貨車」、これは面白い。これは、北海道ならではの句だと思います。かつての列車だと思うのですが、

昆布の貨車と客車二両の根室線

大野　林火

二両あって、そのうち一両は昆布が積まれている、一種のコンテナですね。そしてもう一両は客が

乗っている。時代を感じる句ということですけども、結局、そこに住んでいる人だったら見逃してしまいがち。これは旅人が見ていたからこそ、この昆布と客がより深く共存しているのだ、ということを見出しているという考えですね。ちょっと文体が、やや散文的ですけども、これは民俗資料的に、非常に面白いと私は思っています。

それに対して今度は、石狩、札幌、あのあたりにいきたいと思います。札幌は内陸で、石狩は石狩川の氾濫によってもたらされた石狩平野。一方では海にも接しているし、内陸に丘陵が多いという面白い所です。

玫瑰（はまなす）や今も沖には未来あり

中村草田男

この玫瑰という植物は、「知床旅情」という歌が大ヒットしたことで、皆さんご存知かと思いますが、あの歌のせいで玫瑰をひ弱な花、可憐な花だと思っている人が結構多かったことに、私は驚きました。どうしてそう思うのですか？ と聞いたら「知床旅情」にははにかむような可愛い女の子が出て来るからと。でも実際は、玫瑰というのは非常に強くて、棘もあるしパワーもある花なので全然違います。北の浜辺に相応しい。季語の本意について考えるきっかけにもなった花でありました。

石狩は天衣無縫の雪ばかり

櫂　未知子

これは石狩らしさを詠んだつもりです。

そして、『カムイ』という第三句集に入れました次の句、自分でもよくわからないけども好きな句です。

地吹雪や蝦夷はからくれなゐの島

櫂　未知子

雪なのに「からくれなゐ」というあたりが、蝦夷に相応しいかなと思いまして作った句なのです。いかに自分自身が地吹雪を嫌っていたかが出ているかなと、思っております。

私、北海道に今は住んでいないし、かといって観光で行っているわけではないのに何でこういう句を作ったかというと、実は、年に四、五回、完全ボランティアとして句会を札幌で開いております。もう十二年たちます。つい二週間前にも行ってきました。

その中で、それまで全然帰ってなかった故郷に定期的にある程度行くようになってから、住んでいた当時とはまた違う、或いは東京に来てからとも違う故郷の見方ができて来ました。郷里ならではの季節感というもの、それをしっかりと把握することが出来ました。

北海道では、実は桜の後に梅が咲くのです。前から知っていましたがかの地には曼珠沙華はない。柿の木はあまりない。あってもあまり良い実はならない、寒いから……と、いろいろ学ぶことが出来まして、生活者としての視点を少し整えることが出来るようになりました。

句集のタイトルを『カムイ』としたのは、そういうことなのです。積丹（しゃこたん）半島に神威岬というアイヌ語のカムイ、神様という意味のカムイ岬がありまして、それで付けたのですが、やはり故郷を見直した、もう一度取り戻してみたということで、このタイトルを『カムイ』というものにいたしました。

自作ではありませんが、同じく北海道で詠まれた句に

青春かく涼しかりしか楡（にれ）大樹

鍵和田秞子

があります。楡の木ですね、楡。これ一体何処かといいますと…、札幌、これは北海道大学です。ここで学んだ学生さん達の青春というものも、きっとこんな風に涼しかったのだろうねという作品です。それで、楡の木に問いかけているというか、本当に涼しげですね。

次は、不思議な詩というか、凝っている感じの一句、

札幌の春や馬橇（ばそり）の鈴の音

渡辺　白泉

「札幌の春や」で一旦切れます。そして「馬橇の鈴の音」といっています。コリコリと行く「馬橇の鈴の音」、やっと春がやってきたという感じですね。札幌という町はもともと田舎でしたから、昭和のころまで橇も走っていた。私が子供の頃までは、冬になると皆さん橇を利用して荷物などを運んでいたものです。橇は冬の生活道具として使われていたわけです。

青森に向かいます。

みちのくの淋代（さびしろ）の浜若布寄す

山口　青邨

これを読んだ時に、ああ、いい句だなあと思って。素晴らしい地名ですよね。この句を知った方は淋代に行きたがるそうです。青森県三沢にありますが、名前がいいので俳人たちは皆行きたがる。しかし、行かない方がいいと言う人もいます。日本三大がっかり名所の一つです。俳人にとってのね。

例えば、観光地でがっかりする所といえば、高知のはりまや橋（播磨屋橋）。そして札幌時計台。あともう一つ何なのでしょうね。実はこれ、何だかわからない。私は日本三大がっかり俳人と言われたことがあります。あるかたがたは私のことを実はすごく背の高い人だと思っていたんですって。もっとずっと背が高くて、そしてね、ものすごく怖い顔をして歩いているのだと思ったくらいって。小柄な人で、がっかり俳人と言われたのです。あとの二人は？と聞いたら、言えないって言われました。

そういうことで、はりまや橋に実際に一度行った人が景色も何もない道路橋だったといっておりました。襟裳岬と同じくらいがっかりするらしいです。

みちのくの雪深ければ雪女郎

山口　青邨

こんなに雪が深いのならば、雪女郎もきっと現れてくるであろう、という山口青邨の句。これはかすかな色気がある句ですね。

みちのくの旅に覚えし薄暑かな

高浜　虚子

大味なのですが、なるほどと。みちのくの旅の中で薄暑に、出会ったといわないで、「覚えし」と思い切ったあたりがいいですね。上手いなとやはり思いました。

みちのくの風の香りのうこぎ飯

嶋田　麻紀

「うこぎ（五加）」というのは山野に自生しているのを雪解けの頃、摘み取って来てさっと茹でてご飯に入れるらしいです。

これまでの四句、すべて「みちのくの」となっていますね。ですから非常に範囲は広いのですが、この「みちのく」という、どこか冬をつい思い出す名前がもたらす効果というものを、これらの句から非常に感じます。

先の青邨の句は単に「淋代」と言わなかったのが好いですね。みちのくの、もしかしたら端かもしれない「淋代」で、という意味合いを持っていたことを非常に感じさせてくれる句でした。

今度は、場所を限定しまして津軽に行きましょうか。津軽もいい地名ですね。

面（おもて）つつむ津軽をとめや花林檎

高浜　虚子

なんとなく、林檎の花と同じような色白なお嬢さんじゃないかなと思いますね。

弘前も、林檎ですね。確か、こちら平泉も林檎の産地でしたね。

林檎散る津軽は夜もほの明し

成瀬　正俊

林檎の花が満開になって、その白い花がはらはらと夜、散っているわけですね。その花びらの透きとおったがゆえに、津軽の夜は少し明るいような気がする、という。これも繊細で美しい句、やはり津軽が効いている句です。

次は、非常に大雑把な句で、

秋風のどこにも吹けり竜飛崎

星野　立子

あそこはとにかく風が強い。これは「どこにも吹けり」と大雑把に、そして「竜飛崎」（津軽郡外ヶ浜）とおとしたあたりが良かった。さすが虚子の次女。この地名がなければ、この句は詩句になれない、そのような句でありました。

八甲田兜並びに青嵐

遠藤　梧逸

確かに八甲田というのは一つの山じゃないので、若干舌足らずでありますけども、これはよくわかる表現だと思いました。これは「青嵐」がよくきいていると思います。

さて、此処平泉では、松尾芭蕉の

夏草や兵どもが夢の跡

五月雨の降のこしてや光堂

あまりにも有名です。解説も何もいりませんね。世界遺産登録になって、やはり、ここは芭蕉の句の地だと思うと、俳人としては感激するものですね。芭蕉はここに立っていたのだということを思わせてくれる。やっぱり名句というのは時代を超えて残るものだなと、こういった句から私はいつも思うのです。やはりこの芭蕉に拠って、皆さん、ここに来て一生懸命、句を作ってらっしゃるのですね。その中の一部をひとつ引いてまいりました。

雉子鳴くや水面応ふる毛越寺

沢木　欣一

地名がなかったら…。という感じもしないでもないですが。なにか、あの沢木先生らしい大雑把さがあって。あんまり拘らない方でしたね。なるほどそうか、こういう感じか、と今日大泉が池を見て感じております。そして、

光堂より一筋の雪解水

有馬　朗人

綺麗な句ですね。有馬先生の句の中で一番好きです。

毛越寺飯に蠅くる嬉しさよ

金子　兜太

これは非常に兜太先生らしい骨太な句です。綺麗だ、綺麗だと言わないで、今食べようとしているご飯に蠅が飛んできちゃったよ、というところがいいですね。兜太先生、こういう挨拶句を作られていたのかと、ちょっと驚きました。面白い句ですね。

涼しさや礎石ばかりの毛越寺

遠藤若狭男

これもですね、最初挨拶句としては淋しくないかなと私、思っていたのですけども、実際にその体験をしますと、あの味わいのある礎石があちこちにあるということで、なるほど、これ、よく出来た句だなと感心しました。この遠藤若狭男さん（平成三十年十二月に亡くなられてしまいましたが）、こういう素敵な句を作っていたのだなということと、実際にこの場所に立ってみると、わかる感じですね。非常に実感いたしました。

それに対して、松島ですね。もう皆さんご存知の通りの松島です。おそろしいことに、「松島やああ松島や松島や」という句は、本当にあると思っている人が全国にたくさんいるそうで…。あれ、芭蕉の句だというのですよ。昔、ポスターのタネではないけど、観光協会の方で勝手に作ったというのが通説だとか…。

山口青邨先生は地名を活かすというか、その地名が屹立して見える俳句を作られる方だったのだな、ということを私は思いました。

松島の末に雪ふり牡蠣育つ

山口　青邨

この前の東日本大震災のときに、松島もかなり被害があったようで、牡蠣が駄目になったという話を聞きました。しかし、松島湾内外の島々が松島の町を救ってくれたという風に言われているそうですね。島が人を呼び、また島が津波を打って

止めたという。これ、何か非常に興味深いことだなと私は思いました。

曾良（河合曾良）は皆さんご存知ですね。元禄二年の句

松島や鶴に身をかれほと、ぎす　曾良

「ほと、ぎす」、声は美しいけれど、身なりがみっともないから鶴に皮だけでも借りたら？　みたいな感じの句ですね。ちょっと笑える句でございました。

しぐるると蕓（いらか）の反りをふり仰ぐ　富安　風生

瑞巌寺を詠んだ、これもよくわかる句だと思います。美しく品のある句ですね。

それから今度は秋田県は横手。

私横手にダウンコートを着て行ったわけです。「かまくら」で有名な地に。その時、ダウンを着ているから大丈夫と思って。ぼたぼた雪が降る中、傘も差さないで歩いて…。そうしたら中まで浸（し）みてしまいまして、生涯最大の風邪をひいてしまいました。北海道の雪は乾いているんです。同じように思っていたので甘かったですね。横手は「かまくら」を作れるくらいだから湿気があるのですね。北海道では雪合戦をするときには、雪がさらさらし過ぎているので、わざわざ水を付けてやっております。そうすれば固まるのです。だからその辺の雪質の違いというのが、この「かまくら」というものにも出てくるんだなということを思いました。

かまくらのもらす灯のうち人の過ぐ　神蔵　器

「かまくら」といえばやはり横手。これは小正月の行事でございまして、今は二月にやっていますけども。「かまくら」と聞いただけで、あの町を思い起こせるということ、そして尚且つ、神蔵器先生のこの句を詠むと、ああ行って見たいな、という気になりません？「かまくら」から漏れている灯りがあって、そこを人が通過していくのですね。月光を浴びているような感じで。

五月雨をあつめて早し最上川　芭蕉

ご存じの芭蕉の句です。最上川という名前をちゃんと知ったのは、この句のお蔭だと実は私思っておりまして。もともとはあんまり興味を持っていない川の名前だったのですが、俳句を始めてから注目するようになりました。

閑（しずか）さや岩にしみ入蝉の聲

山寺（立石寺）。皆さんの方が詳しいと思います。この「閑さや」の句は山寺のものですけども、初案は「山寺や岩にしみつく蝉の聲」と、外面的です。私は、この「山寺や」の初案から特定の寺の名を消すことによって、かえってその寺が思われるという、とても印象的な上五になった。これは推敲がすごかったと思いますね。

痛感するのですが、自分の句を推敲するというのは一番難しい。芭蕉のこの推敲のセンスというものを、私はこの句を見ると実感しています。

今度は須賀川へ。

煙なき牡丹供養の焔かな　原　石鼎

須賀川は意外なことに東日本大震災の被害が多かったようです。かなり家が倒壊した跡があって更地が多かったです。お墓が結構倒れたままでした、だいぶ直しているみたいでしたが。牡丹供養というと須賀川という地名がぱっと出てきますね。地名がもたらす力というか、強みを、牡丹供養の句を見るたびに思います。

それから秩父で注目しましたのは、実は兜太先生のかの有名な句、

曼珠沙華どれも腹出し秩父の子　金子　兜太

私にとって秩父というのは、何となく貧しい場所というイメージでして。兜太先生のご実家は医者でした。その頃の、ある種の田舎臭さ、そしてある種の貧しさというものを「どれも腹出し」と

いう表現で表現しえたというか、むしろ、その秩父の泥臭さを魅力に変えたというか、これも俳句の力ではないかなと思いました。

この句が面白いのは、「誰も」じゃない、「どれも」。非常に即物的な深い句ですね。ここからも、兜太先生という方はすごい方だったのだなと思いますね。この句を知った時に秩父という場所を私は学びました。

それから、甲斐にいきましょう。

芋の露連山影を正しうす　　飯田　蛇笏

余りにも有名な句です。下の「芋の露」という近景があり「連山」という遠景がある、俳句の王道をいく作り方です。まさに名句ですね。

蛇笏については

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり　　蛇笏

という句があります。ところが、あの頃「秋風鈴」という項目が『歳時記』に無かった。今まで『歳時記』に載ったことがないのです。それで「秋風鈴」という項目を作ってもらって。でも、未だに多分、皆さん持ってらっしゃる角川の歳時記には「秋風鈴」の項目に、蛇笏の一句が載っているのだけではないかと思います。きっと皆、恐れ多くてそこに載せられないのですね。匹敵するような句を作らないと、そこには載らないと思います。

私は定期的に山梨県の山蘆（さんろ）にお邪魔していまして、山蘆文化振興会に入っています。

なぜ俳人たちはこの山蘆に行きたがるか。つまり、その名句の生まれた場所に行きたい。そして名句を生んでくれた、そこを見てみたい。俳人たちは跡を偲ぶという癖といいましょうか、名句の生まれた場所に行ってみたい、味わってみたいという気持ちが強いのです。

そして、あそこ山蘆を訪ねた方は必ず尋ねる。「くろがねの風鈴を下げている所は何処ですか？」必ず聞きますね。私も勿論、最初に聞きました。「どこにあったのでしたか？」と尋ねたら、

「そういえば無かったわね」と。余りにもご要望が多いので、今はちゃんと、風鈴を下げてくれてます。ですから皆さま、文化振興会へお入りください。年間五千円で安いから。色んな特典が付いてくる。山蘆の山椒の漬物も会報に添えられてきます。

皆さん、こう、行って見たい、という句を作ってくれた人たちがいたということは大切ですね。タクシーに乗り、

「飯田蛇笏のところまで」

と言うとすぐわかります。

レジュメには関西というか、西日本の方で生まれた名句を上げております。例えば、この阿波踊りの句が、果たして名句かどうかといえば不安なのですけども、

手をあげて足をはこべば阿波踊　　岸　風三楼

今風に言うとお馬鹿な句。でもこれって、これを読むと、あぁ何か簡単に踊れそうと思えてくる句ですね。実際は阿波踊りって難しいのですが、この句を読むと、ちょっと行って踊ってこようかな、という気持ちになってくる。だからこれは一種の名句（迷句）かも。

谺（こだま）して山ほととぎすほしいまま　　杉田　久女

「英彦山（ひこさん）」（福岡県）の句です。結構険しい山だそうです。久女は五、六回登ってこの句をものにしたと言われていまして、句に取り憑かれていたというところがあったのですね。私は逆に英彦山というところに登るのが怖いな、と思うようになってしまいまして。何か、久女の信念みたいなのに取り憑かれたらどうしようと感じてしまうのです。

それに対してですね、上手いなと思うのが、

祖母山も傾山（かたむくさん）も夕立かな　　山口　青邨

祖母山（大分県と宮崎県の県境）に傾山、響き

がとっても面白くて、私も山の名をこの句から覚えました。そしてですね、ＮＨＫの取材で現地、九州に行ったときに、

「あそこですよ」

と指差されて、なんだ、たいしたことないなと思ったのでした。富士山のような圧倒的な美しさというような景は遠くからはあまり感じられなかったのですが、やはりこれも、名前の勝利だという風に思います。

今回言いたかったことは、それこそ漂泊の心と定住の心ということで、生活者の視点でその場を見ることも大事だけれども、旅人の視点を時々持つことも大事じゃないかと。客観的に見るという意味ではなく、もしかしたら二度と来られないかもしれないという地に、例えば、今住んでいるところを取り合わせてみるのも面白いのではないかなと思います。二度と来られないかもしれない、ということを考える。

それで、後もう一つですね。名句はその地を育てるということもあると思いますね。その地名を育ててくれている、と言ってもいいかもしれない。更には、その良い句を作れば、人をその地に惹きつけてしまう。実際はそれほどの所では…。でもつい、行って見たいな、という気持ちになると私は思います。

この平泉は名前のみが育ってしまった感もあります。平泉にお住まいの方はそのことを充分に誇りに思われて、ぜひ、芭蕉を超えるような名句を（一同笑）作っていただいて、もう一度平泉の名を全国に轟かせて、あるいは世界に発信させる、ということが必要になってくるのではないかな、と思います。

あの人の、あの名句がある場所だ、ということで世界中を惹きつけるということ…。今後とも、みなさま、ぜひ励んでいただきたいと思います。どうも、ご清聴ありがとうございました。

（拍手）

プロフィール

かい　みちこ

北海道生まれ。「群青」共同代表。

『季語の底力』俳人協会評論新人賞

句集『貴族』（邑書林）『蒙古斑』（角川書店）

『カムイ』（ふらんす堂）俳人協会賞

・どの家にも修羅一人あり墓洗ふ

・いきいきと死んでゐるなり水中花

・椅子置けば部屋となりけり遠花火

・一瞬にしてみな遺品雲の峰

法華経一日頓写経会

六月十四日（第二日曜日）午前十時より

六万九千余字よりなる法華経八巻に開経と結経を加えた一部十巻を一日の内に書写しあげる写経会。

奥州藤原氏二代基衡公が、亡父清衡公を追善供養するために修したという善業に倣い、平成九年より毎年開催しております。

詳細は、中尊寺事務局法務部までお問い合わせください。

☎〇一九一（四六）二二一一

風信 / 語録

「一番残るのは、人間の言葉です」

ドナルド・キーン

佐々木　邦　世（中尊寺仏教文化研究所長）

「御著書頂きましてありがとうございました。中味を早く拝見したいです。そろそろ五十年前になりますが、初めて中尊寺に参拝したことは、まだ私の記憶にはっきり残っています」

ドナルド・キーンさんからこの葉書をいただいたのは平成十七年（二〇〇五）の九月でした。

その五十年前ですから、昭和三十年。キーンさんは京都留学の最後に、芭蕉『奥の細道』の研究を通して平泉を訪ねて来ています。

『中央公論』のグラビアにそのときの様子が窺われます。後年、振り返ってこんな風に書いてます。

「京都や奈良の仏像に夢中になっていたが、震えるほど美にうたれ、この世ではない世界に入ったと感じたのは、中尊寺の金色堂の内陣を見た時だけだった」と。

そして、芭蕉ほど真実をつかんでいた人はいないし、平泉は一度も日本人から忘れられたことはなかった、とも語っています。

東京北区のキーンさんの住所を訪ねたことがありました。往ってから気がついたのですが、其処は私がかつて、大学時代に教えていただいた美術史の金子良運先生が住持の無量寺の門前、というか元の境内地だったのです。しかも、八十九才になったキーンさんは、すでにその無量寺の墓地に、自分の墓所を既得、用意されていたのです。『日本の美術』に能狂言面などを書かれていた金子先生の話などを語りあいながら、キーンさん自身が、京都留学中に狂言を大蔵流宗家の茂山師に就いて、週に一度稽古指導していただいたこと、東京の喜多能楽堂で「千鳥」を演じたときには、谷崎潤一郎や川端康成といった方々に観に来ていただいたなど、親しく話されました。

平成二十三年三月、東日本大震災の数日後に、ニューヨークから見舞いの電話をいただきました。テレビで、被災地の人々がだれも列を乱さず、先を争わずに救護を待っている様子に、私も日本人の誇りを実感した、と。

九月になって、大震災から半年経ったばかりでしたが、キーン先生を招聘して、中尊寺で震災物故者慰霊の法要の後、思いを話していただくことになりました。

その際、応接室から会場に向かう前に、「ここで少しの間、私を独りにしてください」と言われたのです。何か、心に期することでもあったのでしょうか。そして、

作家・高見順が、太平洋戦争の末期にあの上野駅で、疎開する人びとがだれも先を争ったりしない、我慢強く堪えていたのを見て、「こうした人々と共に生き、共に死にたい」と書いています。私も、そう、こうした日本人と共に生き、共に死にたいと思います。

そう話されてから、集まった人たちとにこやかに手を握りあってエールを送っていただきました。

「また中尊寺でお目にかかりたいです」と。二〇一四年の年賀状は筆跡が少し揺れておりました。

平成三十一年（令和元年）

二月二十四日　永眠

享年九十六歳

四月、青山でのお別れの会には、キーンさんが満面に笑みを浮かべた遺影が飾られていました。

「一番、残るのは人間の言葉です」と、いつか話されたのが思い出されます。

「ドナルド・キーン先生が失望なさる日本になっていくのではと心配です」

東京のあるキャリアウーマンから頂いた便りに書かれていました。

大館の人

破石晋照

秋田県大館市は奥州藤原氏ゆかりの地。四代泰衡公が源頼朝に追われ、贄の柵（現在の大館市二井田）に立ち寄ったところ、家臣の河田次郎の裏切りにより遂に命を落としたと伝えられる奥州藤原氏終焉の地です。

大館市二井田に残る錦神社は泰衡公を祀った神社として伝えられています。山田貫首に随行し、初めて訪ねたのは平成二十七年、年の瀬二十七日のことでした。貫首は奥州藤原氏ゆかりのその場所への訪問をかねてより熱望され、漸く実現することとなったのでした。しかしながら、当初は知り合いもおらず、貫首と二人、車中では大館の人々が平泉のことをどのように思っていらっしゃるのか、今回の訪問をみなさんが受け入れてくださるのか、などと少しの不安を話しながら、高速道路を北へと進んでいきました。

言い伝えによりますと、泰衡公の亡骸は当時の大館の人々によって錦の直垂に包まれて埋葬され、「にしき様」とよばれたその墓所はやがて錦神社となり、今日まで続いてきたということです。

岩手県南から秋田県北に向かう道のりは長く、高速道路はやがて奥羽山脈に飲み込まれていきます。師走のことでしたので、奥羽山脈に差し掛かるころには、折からの雪で視界が不良になり、果たして無事に泰衡公終焉の地にたどり着けるのかという心配をしながらも、このような真冬に雪国大館を目指していることに、何やら楽しくもありました。

雪はしきりに降りはじめ、車の外は北国の冬の冷たくて凛とした空気に変わっていました。耳を澄ませば深々と降る雪の音が聞こえてきました。ここが泰衡公の終焉の地。

文治五年、贄の柵を目指す泰衡公の後を追い、この長い道のりを来た女性がいました。泰衡公夫人は夫泰衡の後を追い平泉から北上。現在の比内町八木橋にたどり着きますが、時すでに遅し「泰衡公は討たれた」との報告を聞くと嘆き悲しみ自害を遂げます。人々は泰衡公夫人を憐れみ、御霊を慰めるために祠を建立しました。この祠はやがて西木戸神社とよばれ夫人の悲涙を今に伝えています。

貫首と私を乗せた車は降る雪の中を進み、ついに錦神社に到着します。するとどうでしょう、たくさんの方々が傘もささずに神社の前に集まり、私たちの到着を待っていてくださいました。そこにいらっしゃった地元町内会の方の話を伺うと、この二井田の皆さんは毎年泰衡公の御命日の九月三日、この錦神社に集まり泰衡公を供養していただいているとのこと。二井田のみなさんは泰衡公の出来事を絶やすことなく大切に、今日まで伝えていらっしゃったのです。錦神社をみんなでお参りし、そしてきりたんぽを食べるのが、二井田の泰衡公の御命日の過ごし方。四代泰衡公は平泉から遠く離れたこの大館の地で土地の神社となり、今でも人々の絆をつないでいました。

初めての訪問から四年、折にふれて貫首は大館を訪れました。いまでは大館の道を通るたびに、大館の人との色々な思い出がうかんできます。そこに行くたび出迎えの人々の数は増え、いつしかお互いに連絡を取り合い、平泉と大館を互いに行き来するようになっていました。

春夏秋冬、どんな時に訪れようとも、錦神社の鳥居の前で待っていてくれる人がいます。一緒に手を合わせてくれる人がいます。あたたかい言葉をかけてくれる人々がいます。きりたんぽを用意してくれる人がいます。そしてお互いにまた会えたことを喜び合う。遠い昔、泰衡公とその夫人が通った悲涙の道は、平泉と大館の交流の道となりました。

平成二十九年の春、中尊寺ハスが大館に贈られ、錦神社の前で花を咲かせました。奥州藤原氏が作ったご縁で、また一つ遠く離れた絆が確かに結ばれたのです。

平成30年９月　錦神社蓮池にて

（山内　金剛院副住職）

〈緊急の提言〉

平安時代でただ一つ、平泉「伝教大師石像」の保護を岩手県に望む

―謎の大師石像のルーツを追う―

菅野成寛

はじめに

平泉町長島の月舘地区に、ながらく地域の人々の信仰を集めてきたナゾの石像が伝わる（図1）。「オデェッサン」（お大師さん）、と地元では親しく呼び慣わされてきたものだ。祭礼日の四月二十四日には、疱瘡などに効くとして多くの参詣人で大盛況だったことを、所有者の三輪神社の宮司さんは語っている。

私は平泉の関山のなかに暮らしながら、不明にもオデェッサンの存在を知らずに過ごしてきた。ところが二〇〇七、八年の頃、友人の考古学者で平泉町職員の八重樫忠郎さんからその存在を告げられ、さっそく二人で見に行った。直感的に、これは専門の美術史家の判断にゆだねるべきだと思い、すぐさま友人の浅井和春さん（当時、青山学院大学教授）に連絡し、二〇〇八年春、三人でオデェッサンの宝前にたたずむこととなった。

浅井さんは後に、その時の印象をこう記している。「二〇〇八年の四月十七日は、私の研究人生にとって忘れ得ぬ一日となりました。（中略）等身大よりやや大きめ（像高一〇三・三センチ）の像を一目見て、いい知れぬ身震いのようなものを感じたことを今でも忘れません。まぎれも無い平安時代後期、十二世紀初期を降らない都の正統的な様式をしめす作品です。その頭巾を被って坐す姿は、確かに伝教大師もしくは天台大師（智顗）に相当するものでした。（中略）いずれにせよ延暦寺を開いた最澄の神格化もしくは仏格化と密接に関連する図像とおもわれたのです。」（中尊寺編『「平泉」伝承の諸仏』二〇〇八年）。

さらに浅井さんは、現地で我々に、石像の文化財としての重要性（おそらく平安期唯一の大師石像で、国の重要文化財クラス）と、保護の必要性も強く訴えられたのであった。

この石像が十二世紀初期の作品とすれば、まさに初代藤原清衡が中尊寺を創建した時代ではないか。こうして私の〈オデェッサン（お大師さん）のルーツ〉探索の旅が始まったのである。

一、江戸期のオデェッサン

この二〇〇八年からややあって、九名の専門家による本格的な石像調査が国の予算で実施され、二〇一〇年にはその概要が明らかとなった。調査報告書のポイントだけ簡単に記すと、まず姿は、頭巾状のもの（正しくは「帽子」といい、寒暑を防ぎ礼容をととのえるもので、本来、天台大師が隋の煬帝から贈られたのが起源と伝える）をかぶる僧形の坐像である。衣をまとった上に袈裟を着け、両脚を仏像のように組んでいる。印を結んだ両手の上に、球形の持ち物を載せる（図1）。石像の材質は溶結凝灰岩と見られ、制作年代は初代清衡の十二世紀初期で、像高は一〇三・三センチ。安永四年（一七七五）の地誌から、天台大師とよばれて現在の地にあったことが分かり、両手の印（禅定印）の形から天台大師の可能性を指摘する（科学研究成果報告書『東日本に分布する宗教彫像の基礎的調査研究』二〇一〇年）。

1、平泉町長島の石像（実は伝教大師像）

つまりオデェッサンは、十二世紀初期の天台大師の石像というわけだ。これを他の史料に探すと、同じ安永四年に成立した仙台藩編『安永風土記』磐井郡長部村の「大師堂」として、「本尊　天台大師、石仏座像、御丈（身長）三尺五寸」と見える。だが同二年（一七七三）成立の相原友直編『平泉雑記』巻一には「長部村石仏」として、「磐井郡東山長

部村ニ古キ石仏アリ、聖徳太子トモ云、伝教大師トモ云、俗ニタイシボトケト云、其ノ実ヲ知ラズ」と記され、実は天台大師か聖徳太子か伝教大師かは不明で、俗には太子（大師）仏と通称されていたことが判明するのである。

さらにこれを七十五年ほど遡る資料が、元禄十一年（一六九八）成立の「磐井郡東山絵図」である（一関博物館蔵）。この絵図の長部村の部分には、「大師石仏」と墨書された〈石仏座像〉の図像が描かれ、現在と同様の屋外での安置であったことが判明する（図2）。この「大師石仏」とは、まさしく右の「タイシボトケ」のことだが、残念なことに、これをより遡る中世の史料（資料）は発見できず、私のオデェッサンのルーツ探しの旅は行き止まりとなり、しばし途方に暮れることとなった。ところが、二〇一二年頃のことだっただろうか。

2、「磐井郡東山絵図」の大師像と墨書

例年六月四日は、天台宗の宗祖・伝教大師最澄上人のご命日にあたり、全国の天台宗寺院では命日法要（伝教会）が催される。当然、天台宗である中尊寺でも伝教大師画像（図3）を本堂に飾り、ご命日の供養を営んできた。その六月四日、たまたま私の席次が大師画像のすぐ間近にあたり、何気なく画像の下部に記された銘文を一読したところ、たちまち目が釘づけとなった。法要中ながらも幾度となく読み返したところ、何とオデェッサンの由来に関わる新たなヒントが記されているではないか。本画像は年に一度、この命日法要の時間帯にのみ本堂で掲げられ、あとは離れた収蔵室の内部に明年まで秘蔵される。しかも毎年の法要の際の席次は一定ではなく、その折の私の座席こそが銘文の判読に最適のポジションであった。まさしく啓示と言うほかなく、こうして私のルーツ探索の旅は大きく前進することとなったのである。

二、中尊寺の伝教大師画像と銘文

この伝教大師画像の成立は、その銘文から享保二十年（一七三五）の江戸期のことだが、本来、天台大師にしろ伝教大師にしろ、命日法要の際の画像は両大師を讃える「賛文」を上部に配置するのが一般的で（賛文を持たない画像もある）、中尊寺の画像のごとく、その下部に銘文を配置した例は少ない。しかも台座そのものに銘文を記している。つまり本画像は、命日法要の際に掲げる目的で作製されたものではなく、それは銘文を一読すれば明らかであった。そして書かれている内容から推測すれば、十分に平安末期の十一、十二世紀にまで遡って理解しても差し支えない事柄だったのである。銘文（図3）はこうだ。

3、中尊寺の伝教大師画像と銘文

四明絶頂有、伝教大師石像。不詳誰所置。歳月既久、蘚苔侵殴、拝者不喜。因使石工更彫、以安旧所。
享保二十乙卯歳　毘沙門堂第四世　二品公遵親王誌

〈大意〉（比叡山の）四明嶽の絶頂部に、伝教大師の石像があった。誰が安置したものか、不詳であった。歳月が経過し、蘚苔（コケ）が侵食して傷めるところとなり、参拝者の不満をきたしていた。よって石工を使わしてさらに彫り直させ、旧来の場所に安置した。
享保二十年乙卯歳、毘沙門堂第四世、二品公遵親王誌す

つまり、比叡山の四明嶽の頂上部には、享保二十年（一七三五）以前のいつの頃からか伝教大師の石像が祀られて

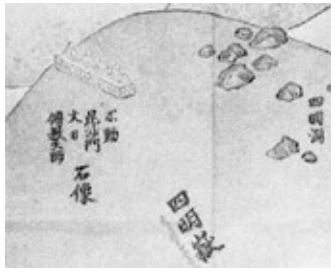
おり、それを京都・毘沙門堂第四代門跡（住職）の公遵親王が彫り直させた、というのである。

銘文を記した公遵親王とは中御門天皇の第二皇子で、兄は桜町天皇である。二度ほど天台宗のトップである天台座主となり（一七四五、四九年）、後に江戸に下って仏教界を統制する最要職（輪王寺宮）にも就き、天明八年（一七八八）、毘沙門堂において六十七歳で亡くなっている（浦井祥子「浅草寺と公遵法親王」『浅草寺』六五〇号、二〇一七年）。銘文を執筆した享保二十年にはいまだ十四歳であったが、本画像の作製もかれ公遵の命によるもので、それは大師石像を再彫するにあたっての記念と記録のためであったろう。少年ながら、まことに周到である。

右の銘文が記された伝教大師画像の台座をよく見ると、どうも石造製のようで、まさしく銘文の内容通りに伝教大師の石像にふさわしい。中尊寺の伝教大師画像が、比叡山の四明嶽に新たに安置され直された伝教大師石像の由来を伝えたものであれば、画像の上部に大師を讃える賛文がないのも当然であった。しかし私にとっては、江戸期以前の比叡山頂に、伝教大師の石像が実在していた事実は大きな衝撃であった。なぜなら、中尊寺は創建当初から比叡山系の天台宗寺院で、しかも既述した安永二年の地誌には平泉の石像が〈伝教大師石仏〉とも伝承されており、そこから平泉の石像のルーツが比叡山四明嶽の伝教大師石像である可能性が大きく開かれるからである。だが問題は、江戸期以前の比叡山関係の資料に、伝教大師石像が確認できるか、にかかっていた。

三、比叡山の古絵図と伝教大師の石像

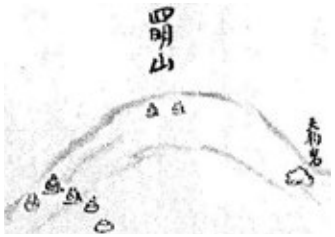
すぐさまあれこれ調べたところ、何と比叡山の古絵図と古記録に二点ずつ、伝教大師の石像が確認されたのである（武覚超『比叡山諸堂史の研究』法蔵館、二〇〇八年）。まず中尊寺の画像（一七三五年）とほぼ同時代の、明和四年（一七六七）に描かれた『山門三塔坂本惣絵図』（内閣文庫蔵）の東塔の部分に、「伝教



4、『山門三塔坂本惣絵図』の伝教大師石像

大師石像」の墨書と図像が確認でき（図4）、ほかに「不動・毘沙門・大日石像」も一緒に並んで存在していた。さらに同年の『山門堂舎由緒記』（巻一）にも、「四明洞（中略）将軍地蔵、不動、毘沙門、並に開山（伝教）大師手刻の石像これ在り」と記され、明らかにこの伝教大師石像は享保二十年に公遵法親王が新たに彫り直させたものであろう（比叡山中にお詳しい中尊寺真珠院住職の菅野澄順老師によれば、いまだ本石像は四明嶽の山中に所在する、とされる）。

そしてこれを二〇〇年以上も遡る、室町後期（十五世紀末～十六年世紀後期）の『比叡山絵図』（比叡山南渓蔵）の四明山の頂上部分に、坐像と見られる七体の図像が確認される（図5）。おそらくこれは正保二年（一六四五）の『比叡山堂舎僧坊記』に、「四明洞、大嶽ニ伝教大師御作ノ石仏七体アリ」と記されたもので、坐像と石仏の数がともに七体で合致する。公遵法親王の銘文によれば、



5、『比叡山絵図』の坐像（四明山頂に二体と、その左下部に五体）

享保二十年の江戸期以前から四明嶽の頂上部には伝教大師石像が実在したわけだから、右の七体の坐像と石仏のうち一体は明らかに伝教大師の石像であったはずである（右の「開山大師手刻」や「伝教大師御作」は明らかに後世の伝承で、これは伝教大師石像の存在に由来した寺伝であろう）。残念ながらこの室町後期を遡る資料は今のところ確認できていないが、以上から四明嶽の山頂部には、室町後期以前から伝教大師石像が祀られていたことが確実となったのである。そこでこれに十二世紀初期の平泉の石像の情報を加えると、一つの重要な推定が導き出せる。つまり平泉のそれは、比叡山四明嶽に安置された伝教大師石像がモデルであったのではないか、と。

なぜならば、初代清衡が十二世紀当初に創建した中尊寺の本寺は、当初から比叡山延暦寺であったからである。それは鎌倉幕府の記録の『吾妻鏡』文治五年（一一八九）九月十七日の記事と、天治三年（大治元年、一一二六）三月二十四日の『中尊寺供養願文』から知ることができる（ともに『平泉町史・史料編一』所収）。前者の中尊寺の堂塔記事には、比叡山延暦寺の鎮守にあたる日吉社や延暦寺系の諸堂が中

尊寺に営まれたことを記し、また後者では天治三年の中尊寺落慶供養に際して、僧・相仁が導師を務めたことを記す。この相仁を、建武元年（一三三四）の中尊寺文書は「相仁山僧」と記し（『南北朝遺文』東北編一〇一号）、この「山僧」とは延暦寺の僧侶のことであった。さらに落慶式の天治三年前後の平安貴族の日記からも、相仁が延暦寺僧であった事実が確認できる（『中右記』一一一八年五月二十三日、一一二二年十二月十九日、一一二七年正月八日記事ほか）。また清衡が供養した、著名な『中尊寺金銀字一切経』の用紙の一部は延暦寺のもので（『平安遺文』一九一七号）、この事実からも比叡山と中尊寺との特別な関係が判明するのである。

そうであれば、既に比叡山延暦寺の四明嶽に祀られていた伝教大師石像を直接のモデルとし、十二世紀初期の中尊寺創建に際して同じ大師石像を関山の山中に安置したと推定しても、もはや不自然ではまったくあるまい。そう考えなければ、清衡時代の平泉に大師石像が所在した理由は説明できない。つまり清衡の中尊寺が目指したものは、延暦寺の天台宗仏教の移入のみならず、山頂の伝教大師石像まで見習った東日本初の、ミニ比叡山化を実現しようとした特別な仏教構想であったことが浮かび上がる。

では清衡時代に供養された平泉の石像は、ホントに伝教大師像だったのであろうか。冒頭で触れた江戸時代の地誌や石像の調査報告書では、〈天台大師像〉の可能性が指摘されているからだ。

四、天台大師と伝教大師の図像

こうした平泉の大師石像の人物名を考える上で、幸いながら平安時代後期の天台・伝教の両大師の画像が我が国に伝来する。まず天台大師とは、智顗（五三八～九八年）という名の中国の高僧で、『法華経』の教理と修行によって当時の中国仏教学を総合した大学者で天台宗の開祖にあたり、隋の皇帝の文帝と煬帝が帰依した。伝教大師とは最澄（七六七～八二二年）のことで、中国の天台宗に学んだ日本の天台宗と比叡山延暦寺の開創者にあたり、最澄の追悼文は嵯峨天皇の執筆であった。

この点で兵庫県の一乗寺に伝わる両大師の画像は、十一世紀の図像として実に貴重なものである（ともに国宝）。まず天台大師像で重要なポイントは、頭巾をかぶった大師像

6、天台大師の画像（一乗寺蔵）
（提供　便利堂）

7、伝教大師の画像（同）
（提供　便利堂）

の頭上に禅鎮とよばれる仏具を載せている点で（図6）、両手の印は合掌印を結ぶ（普通は、坐禅の際の禅定印を結ぶことが多い）。一方の伝教大師像も頭巾をかぶるが禅鎮は頭上に載せず、両手は禅定印を示しており（図7）、これは中尊寺の伝教大師画像（図3）も同様である。この禅鎮の有無は、他の両大師画像にも共通する大きな特徴である。

それが平泉の石像の場合、頭巾をかぶる点で両大師像のうち何れかなのだが（ちなみに慈覚大師像は頭巾をかぶらない）、問題の頭上には禅鎮を置かず（図12）、禅定印であろう両手の上に何か持ち物を載せている（図1）。あるいは両手指の一部を立てているのかもしれない。この石像を調査された浅井和春さんをはじめ、彫刻史の専門家の意見では両手の持ち物の類例がないというから、よほど特殊な石像だったに違いない。

とすれば、やはり本石像は伝教大師像だったのではないか。その理由は、頭上に天台大師像のごとく禅鎮を置かず、さらに両手の印は伝教大師像に通有する禅定印と見られ、違いはわずか両手の持ち物だけである。しかも比叡山延暦寺の山頂部には伝教大師の石像が実在し、その延暦寺が中

尊寺の創建当初からの本寺にあった以上、平泉の石像を〈伝教大師像〉と考えるのが最も自然で素直な理解であろう。平泉の大師石像のモデルは、比叡山四明嶽の山頂部に祀られていた伝教大師の石像で、おそらく四明嶽の石像も禅定印であろう両手の上に何か持ち物を載せていたに違いない。この四明嶽の伝教大師石像は遅くても十一世紀末には成立しており、それは冒頭で浅井さんが指摘された「延暦寺を開いた最澄の神格化もしくは仏格化と密接に関連する図像」、すなわち理想化された伝教大師像の姿なのであり、それが平泉の大師石像の類例のない両手の持ち物に象徴されていた、ということなのであろう。

実は平泉には、もう一体の石像があった。毛越寺の近く、観自在王院跡の屋外に祀られた石像である（千手院蔵）。浅井さんによれば年代は十二世紀後期の如来像で、かなり劣化が進んでいる（図8）。この石像にくらべて成立が早いオデェッサン（伝教大師石像）の劣化がそれほど進んでいないのは（図1）、おそらくこのオデェッサンが当初は中尊寺の施設内に安置されたからで、それがいつの頃か現在地に移坐したものと考えられる。最初に述べたように、元禄十一年（一六九八）には、現在地における屋外での所在が絵図から確認することができる。

8、観自在王院跡の石仏座像

では何ゆえ大師石像が、中尊寺の関山の山中から移動したのか。

オデェッサンの歴史宗教的な環境と発掘調査

これがまたナゾなのだが、石像の環境はまことに歴史宗教性に富んでいた。周囲の〈磐座〉と、石造製の〈宝塔〉と供養碑の〈板碑〉の存在である。まず磐座は大師石像のすぐ背後、高さ約一メートルほどの岩塊で（図9）、石像と磐座との中心部が一直線に並ぶことから、両者が一体的な関係にあったことは明かである。次に宝塔は、平泉型宝塔とよばれる十二世紀後期の石造製のもので（元興寺文

9、磐座（大師石像の背後）

化財研究所の狭川真一氏による）、大師石像の左前方のやや平らでデコボコ状の岩塊上にすえられていた（図10）。これと反対の右前方部には二基の板碑が立ち並び、一基は大日如来の梵字「バン」を刻んだ「永仁二年」（一二九四）銘の板碑であった（図11）。そこに大師石像が存在したわけで、この歴史宗教的な環境から見て、石像の選地は決して偶然ではあるまい。

その点で、美術史や考古学の研究者のなかには、十二世紀当初からの石像の安置を想定される方もいるが（しかし、その根拠は示されていない）、はたしてそうであろうか。十二世紀初期の大師石像からいささか遅れて成立した宝塔の立地が、デコボコの岩塊上ではいかにも不安定かつ不自然であり、どう見ても解せない。ただ、十二世紀以前から存在したであろう磐座がつよく意識されたことだけは確かで、そもそも磐座は古墳時代以来の神の依り代として、我が国のいたるところで信仰されていた。

実は二〇一五年七～八月、平泉文化遺産センターによる大師石像周辺の発掘調査が行われたのである。その要点を簡単に述べると、出土した遺構と遺物から三つの時期が判明し、①中世、②江戸～明治初期、③明治二十七年～現在、の時代に分かれるという。問題は①中世期で、十二世紀の常滑陶器の破片と同期の土器の破片、そして中世と見られる石組みが発見された（同センターの島原弘征氏による）。この発掘調査が、石像の直下ではない点から確実なことは言えぬが、それにしても本石像の直近の地中から、十二世紀の遺物が二点（常滑片とカワラケ片）も出土したことはきわめて重要である。

八重樫忠郎氏によれば、この常滑陶器の破片は十二世紀

10、平泉型宝塔（大師石像の左前方）

11、板碑（大師石像の右前方）

後期の中型の甕製品で、平泉・金鶏山経塚（十二世紀）の出土品とほぼ同タイプとされる。つまりこの常滑片は、経塚に埋められた経筒として使用された、常滑陶器の甕であった可能性が出てきたわけだ。事実、この近辺には、未調査ながら経塚の遺構とおぼしき塚が十基前後ほど点在し、そのうちの一つ、月舘I遺跡の塚上には、何と大師石像と同じ十二世紀後期の平泉型宝塔がすえられていた（岩手県立博物館編『前平泉文化関連遺跡調査報告書』33、二〇一六年。狭川氏による）。この平泉型宝塔と経塚のセットは、これも未調査ながら宮城県の有壁五輪塚（栗原市金成）にも存在し、経塚上に二基ある宝塔の年代は十二世紀後期と十二末〜十三世紀のものとされる（狭川氏による）。ちなみに、経塚上に石造製の宝塔が目印として安置されたケースとしては、既に京都・鞍馬寺経塚の宝塔ほかの類例が存在する（奈良国立博物館編『経塚遺宝』82号ほか、東京美術、一九七七年）。

すなわち、大師石像の地における十二世紀後期の宝塔と常滑片とは当初からセットのもので、この地での経塚の造営にともない、塚上にはその宝塔が、そして塚内には常滑製の甕が経筒として埋納されたものではあるまいか。そしていつの頃かこの経塚が何らかの理由で取り壊され、ひとり宝塔のみが石像の前方へと移されたのではないか。その経塚破壊の最大の理由こそが関山中尊寺からの伝教大師石像の移坐で、既にこの地で信仰されていた磐座の宗教性が何より重んじられたからではあるまいか。

つまり、この地は、古来からの磐座信仰の聖地、霊地としての発祥をもち、そのいわれをもとに経塚も営まれ、やがては大師石像が移坐して板碑も供養され（ただ石像と板碑との前後関係は不明である）、霊場化していったものではないか。この当否は、ひとえに今後における石像直下の発掘調査にかかっている。

いずれにしてもオデェッサンの来歴の大きなヒントが、それとはまったく縁もゆかりもない公遵法親王の伝教大師画像の銘文に存在し、この画像が思いもかけず大師石像にすぐ間近な中尊寺に伝来していたとは何たる奇縁であろうか。まさしく本画像は、本来もっとも所持するにたる寺院に見事ピンポイントでもたらされたわけで、かくてその運命の糸にあやつられてオデェッサンの由来へと導かれたことは、何とも人智を超えた不可思議なる計らいと言うほかあるまい（しかもこれは後から気づいたことなのだが、実は公遵法親王と私とは学生時代からの一つの縁でつながっていたのだった）。仏縁なのであろう。

おわりに

たとえ大師石像が、いつの頃か関山の山中から移動したにせよ、これによって平安時代唯一のオデェッサンの全国的な文化財上の価値がまったく揺らぐものでは一切ない。だが、オデェッサンの鼻は欠け落ち（セメントで補修）、また首も断裂した部分をセメントで接着している。さらに全身のいたるところがコケで侵食されたうえに経年劣化が日増しに進行し（図12）、まことに痛々しい限りである。そんななか、三輪神社の方や信者さんたちによって、ごく最近、保護のための覆い屋が仮設されたことは何とも嬉しいニュースだ。

聞けば、明二〇二一年は平泉の世界文化遺産登録の一〇周年にあたり、岩手県や平泉町をあげて記念イベントが開催されるという。この好機にこそ、その記念事業の一環として本石像をまずは岩手県指定文化財に登録し（既に平泉

12、石像頭部の欠損（鼻梁）右、と断裂（頸部）とコケ

町指定文化財としては登録済み）、必要な保護と保存処置とを是非とも早急に講じてほしい。本石像の重要性は二〇一五年四月十五日付の岩手日報紙や翌年正月の『いわて文化財』２６５号でも大きく訴えられたところだが、もはや五か年が経過しており、世界遺産登録にご尽力された県当局のすみやかなご英断を心から期待したい。

冒頭での浅井さんの言によれば、オデェッサンは「都の正統的な様式をしめす作品」で国の重要文化財クラスであり、それは初代清衡によって大きく開発された平泉の草創期を象徴するまことに希有な記念物、文化財であった。もはや二つとない平安末期の、実に貴重な伝教大師の石像こそが地域民の信仰をあつめてきたオデェッサンなのであり、その価値は実に計り知れない。

※　以上は、浅草寺仏教文化講座での講演内容（「浅草寺別当、公遵法親王と「伝教大師石像」」『浅草寺仏教文化講座』63集、二〇一九年）をもとに、より最新の知見を述べたものである。

（岩手大学平泉文化研究センター）

黄金花咲くみちのく

東京 富岡八幡宮の神饌田　抜穂祭

荻　山　義　浩

「令和」の世になって、秋晴れの十月六日。世界文化遺産平泉の、町のランドマークともいえる金鶏山の麓、花立地内の神饌田（神前に供えるための稲田）で、富岡八幡宮の丸山聡一宮司を祭主として抜穂祭が古式懐しく執り行われました。我々、平泉総社神輿会の総代ほか、五十余名が祭式の場に参列いたしました。

ここで、東京深川の富岡八幡宮と平泉神輿会の機縁、交流の経緯について、少々触れておきます。

今から二十五年前、平成七年です。

蘇えれ黄金平泉祭「古都平泉・九百年の道」が催行されていまして、その祭りのハイライトとして、九月三日の神輿渡御に江東区深川から富岡八幡宮の神輿に参加していただいたのが始まりでした。平泉のほか、他所から出張ってくれた三基の神輿のなかで、兎に角、水を掛けながら勇壮に進む富岡の「水掛け神輿」を目の当たりにして、圧倒されました。あの勇壮な水掛け神輿を、平泉でわれわれも担げないものか、とだれもが思い、遂に立ち上がりました。

その年の暮れには神輿を発注し、（そんな短期間では製作無理ですから、余所の発注済みのを廻してもらいまして）翌年の二月には新たに平泉神輿会を結成し、七月にはもう初渡御にこぎつけた次第です。

以来、二十余年、いろいろ指導いただきながらも、深川の特別例大祭には、特に招かれまして平泉神輿を担ぎ、お江戸を渡御、殊に、平成の天皇皇后両陛下天覧の栄に浴し、交流が続いたわけです。そして、富岡の神輿連の皆さんにとっても、平泉の歴史を感じながら中尊寺の月見坂を担いで上るのは、好い汗を流す機会であったようです。

こうした繋がりのなか、一昨年、平泉の青木町長が富岡八幡宮を訪れた折、祭祀の際に神饌田で収穫したものをお供えしたい旨のお話があり、友好都市でもある当町に富岡八幡の神饌田を設けることになりました。

中尊寺と毛越寺の中間、特別史跡・無量光院跡と指呼の地に、平泉神輿会の総代・髙橋正洋さんの所有田がありまして、耕作も一切、快く引き受けていただきました。

令和元年五月十二日、御田植え式。神輿会会員の手によって植えられた苗は、髙橋さんのお世話で順調に生育し、今回の抜穂祭の運びとなったわけです。祭式には、中尊寺の山田俊和貫首、富岡八幡宮神輿総代連合会の顧問・髙橋富雄さん、平泉総社神輿会の千葉庄悦会長、斎藤副町長はじめ、町内の皆さんが参列され、執り行われました。神事につづき、浄衣姿の神職や当神輿会員によって刈り取られた稲穂は、稲棒（俗に穂荷負）に掛けて天日乾しにされ、収穫を待つこととなりました。

仏土平泉はまた神仏習合の地

今回収穫した精米は、令和最初の新嘗祭（大嘗祭）において、神饌として捧げられるほか、その「おさがり」として氏子や参詣のご信徒に配られ、また、これから一年間の祭祀に用いられます。

神輿を通じての相互交流、毎年、木場公園で開催される「江東区民まつり」への参加、グリーン・ツーリズム（民泊修学旅行）を通じての中学生の交流など、これまでの繋がりが、平成二十一年の江東区との友好都市の締結として結実したのです。

神饌田のご縁が、末永く続いていくことを信じてやみません。

おぎやま　よしひろ
平泉総社神輿会　副幹事長

写真提供　岩手日日新聞社

近代的大型国語辞典『大日本国語辞典』の刊行

――大槻文彦著『言海』との関わり――

高森良文

はじめに

私たちが最も多く使用する辞典はおそらく国語辞典であろう。国語辞典のうち、初めての近代的大型国語辞典と定評のあるものに『大日本国語辞典』がある。この辞典は上田万年・松井簡治の共著となっているが、内容の執筆は松井簡治の単独によるものである。千葉県銚子生まれの国文学者松井簡治（文久三年〈一八六三〉～昭和二十年〈一九四五〉）は、『大日本国語辞典』全四巻を大正四年（一九一五）から八年にかけて刊行した。約二十万四千語を収録し、当時の国語辞典の中で語数においては最大であり、また上代から近世にわたる用例を多く添えている点でも傑出していた。

筆者は『松井簡治資料集』（平成二十六年）の発刊に際して多くの資料を収集した。その資料のなかに松井簡治は、明治二十四年（一八九一）に刊行した日本最初の近代的国語辞典『言海』の著者

『大日本国語辞典』初版　全４巻　冨山房・金港堂
大正４年～８年（『松井簡治資料集』から転載）

大槻文彦（弘化四年〈一八四七〉～昭和三年〈一九二八〉）との関わりについてわずかではあるが記しているので紹介したい。

『大日本国語辞典』の編纂動機

明治二十五年ごろ簡治はなぜ、国語辞典の編纂を思いたったのか。従来の資料では、簡治の辞書編纂の動機に触れているものがかろうじて一つあり、その「辞書の沿革」（『学苑』昭和十年）のなかで、

「日本語の辞書も随分あるが、皆不完全で満足する様なものがない。何とかしていいものをつくりたいと考へついたのが、動機といへば動機であらう」

と述べているが、『松井簡治資料集』の編集過程で動機に関する興味深い記述があったので引用したい。それは簡治が七十八歳の時、生まれ故郷である銚子で昭和十五年八月、銚子商業学校を会場に銚子商業・銚子中学合同講演会において、明治二十四年に完結した『言海』が辞書編纂のきっかけと講演している。

「私が関係した他の仕事で辞書の編纂といふものがあります。そのころ大槻文彦博士の『言海』はありましたが、これは小さなもので語数は三万九千百三語しかないので、ひいても中々思ふやうにでてこない。一体日本の言葉はどの位あるかと調べてみたら約四十万語あります。これではなるほど『言海』をひいても十遍に一遍しかでてこなくても無理はありません。却説そこでその四十万語をみなとりいれた辞書をつくるとしたら大変な努力と時日を要しますから、先づその半分で我慢することとし、この二十万語を二十年でまとめることに予定をたてました。当時私は三十四歳でありました。一年三百六十五日のうち、六十五日はいろいろな差支のために仕事が出来ぬと考へ、一年三百日働くことと定め、毎日五時間宛他の仕事もしながら、その合間に辞書編纂に従事することにしました。夜九時に寝れば朝三時、十時のときは四時に起きるこ

ととして幸ひ病気もせず骨折った甲斐あって十八年目の大正四年には第一巻が出来、大正八年に至って完成しました」（注1）

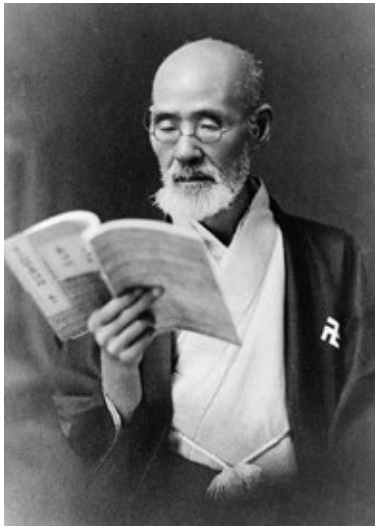
また、簡治の「辞書と歴史研究」（『国学院雑誌』昭和二年）によると、予定の二十万語を二十年、六千日で仕上げるには、一日約三十三語消化しなければならない計算になり、予定通りに辞書を作り上げたと述べている。いかにも苦しい仕事であったように思えるが、簡治自身は、ちょうど子供を育てるようなもので、確かに骨は折れるが育ってゆくのを見るのは非常に楽しみだったから一向に苦痛ではなかったと語っている。大正四年から八年にかけて『大日本国語辞典』初版の全四巻が冨山房から刊行され、昭和三年（一九二八）には仮名、漢字の索引一巻を加えた修正版の全五巻を刊行して簡治の当初の辞典編纂計画は達成されたといえる。

大槻文彦との関わり

『言海』の著者国語学者の大槻文彦は、父に儒

編集所での松井簡治と『大日本国語辞典』の原稿　昭和７年頃
『松井博士古稀記念論文集』より

学者の大槻磐渓、祖父に蘭学者の大槻玄沢がおり、ＪＲ一ノ関駅前には「大槻三賢人」として三人の銅像がある。『言海』は小型判、中型判が次々と版が重ねられ、大正元年（一九一二）文彦は、冨山房と『言海』の増補改訂の契約を結び、編纂に専念することになる。しかし、原稿執筆が完了することなく昭和三年（一九二八）二月、八十二歳で他界した。文彦の亡き後、兄の大槻如電らが増補改訂の作業を引き継ぎ、昭和七年から十年にかけて『大言海』全四巻が冨山房から刊行された。刊行



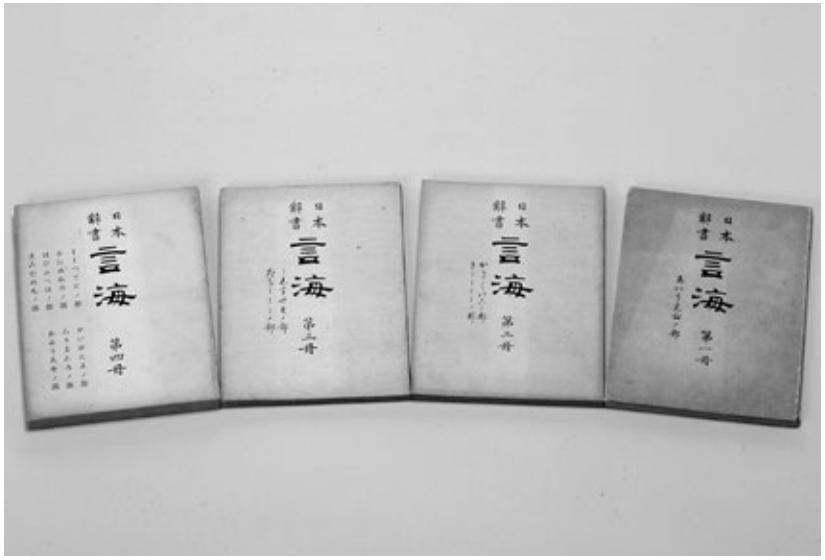
晩年の大槻文彦（80歳・大正15年）
一関市博物館提供

後翌年の昭和十一年、松井簡治は冨山房の社史『冨山房五十年』に「冨山房と辞書出版」と題して一文を寄せている。その中で大槻文彦との思い出として次のように記している。

「（前略）『大言海』の大槻博士は、生前私の顔を見ると、「君と一夕辞書編纂の苦心談をゆっくりして見たい。この苦心は辞書編纂の経験のない者には解らない。君の国語辞典の語句の出典は感服だ。僕は語源を主にしたいと思って居る」といはれたが、種々の支障で十分に苦心談を交はす機会を得なかった事は今でも非常に遺憾に思って居る。（中略）大槻博士の『大言海』も、自分等の『国語辞典』も皆同一書肆冨山房から出版された事は何等かの因縁かも知れない」

近代的国語辞典を編纂した二人の苦心談がもしも、交わすことができたならば、非常に興味深い対談ではないかと推察され残念である。

なお、松井簡治が一生をかけて編纂した『大日本国語辞典』の増補資料が核となり、百年余りの



『日本辞書　言海』初版４冊本　明治22年～24年　一関市博物館蔵

歳月を経て日本最大の大型国語辞典である『日本国語大辞典　第二版』（全十三巻と別巻一巻・平成十二年〈二〇〇〇〉～十四年）が小学館から刊行され現在に至っている。

本稿執筆にあたり大槻文彦及び『言海』の写真提供を頂いた一関市博物館に謝意を表します。

注1　『極東新聞』第百九十五号　昭和十五年八月三十日付　『極東新聞』は、昭和五年（一九三〇）一月から十五年十月まで千葉県銚子市本城町において越川芳麿が主筆となり発刊した地方新聞

参考文献
『出逢った日本語・50万語―辞書作り三代の軌跡―』松井栄一　小学館　平成十四年
『日本語一〇〇年の鼓動　日本人なら知っておきたい国語辞典誕生のいきさつ』倉島長正　小学館　平成十五年
『松井簡治資料集』松井簡治資料刊行会　平成二十六年

たかもり　りょうぶん
天台宗北総教区宝積寺住職　大正大学大学院修士課程修了　松井簡治資料刊行会会員

関山植物誌〈10〉

破石晋照
（金剛院副住職）

ヤマユリ

子供の頃、小さな水槽を一つ叔父からもらった。

叔父の部屋の窓際にあった銀枠の小さな水槽がどうしても欲しくて、ことあるごとに叔父にねだり、ついに手に入れたのだ。

末っ子の叔父は、少年の心をひきつけるものをたくさん持っていた。ラジコンで初めて遊んだ時も、カブトムシに触った時も、そこには叔父がいた。

そしてなにより優しかった。

小さな水槽は、子供の想像力をくすぐる無限の可能性を秘めていた。田んぼでとったメダカ達も、帰り道にむしった水草も、小遣いで買った熱帯魚も、この水槽に入れて眺めていた。

そのころから小さな水槽が側にないとどうにも落ち着かず、自分の部屋には必ず水槽を置き、金魚の一匹でも泳がせていないと気がすまない性分になってしまった。これは叔父にもらった銀枠水槽の呪いのせいに違いない。

優しかった叔父に一度厳しく言われたことがある。オニヤンマを捕まえ、お菓子の箱に「ヤマユリにとまるオニヤンマ」の標本を作った。すると叔父は、生きたトンボを標本にしたことはもちろん。植物のはずのヤマユリを摘んだことも厳しく言った。

オニヤンマのことはさておきヤマユリのことは子供だった私には理解できず、ムッとしながら帰ったが、それでも小さな生き物に対する叔父の優しさは感じたし、それからというもの、そのときの叔父の言葉に縛られ、小さな虫などにも手を下せない性格になってしまった。かくして私は、銀枠水槽に続き二つ目の呪いを叔父にかけられ、その性格が発揮されるとハッと気が付いて叔父のことを思い出し「また叔父の呪いにやられた！」と、ついニヤけてしまう……。

昨年不惑の歳を迎えた私にも、甥や姪ができた。継承者としてどの子に呪いの水槽をゆずるべきか、よくよく観察しようと思う。

ヤマユリ

〈報告〉

光勝院竣工

菅野澄円

令和元年十月二十七日、光勝院御本尊の開眼法要を執り行い、光勝院建設は竣工を迎えました。百五十名が余裕をもって座れる仏堂と広間、賓客・講師の控室となる来賓室、総代会・福聚教会の研修室を備えています。工期十八ヵ月、工員数延べ一万三千八百五十三人。その他にも部品単位の各工場での作業、輸送、事務に携られた方々など、本当に沢山の方々に支えていただきました。同時に、近隣の皆様、事務局へ御来山の方々には長い期間ご不便をおかけいたしました。

十一月十日には、檀信徒、本尊造立にご寄進を頂戴した皆様に内覧の機会をもうけさせていただきました。ご参加の皆様からはお褒めの言葉と今後の諸行事会場としての期待の声を頂戴しました。

三体の御本尊をお祀りする仏堂の床は木曾檜です。この

清々しい香りのする無垢の木肌が、どのように変化していくのかは、管理する私たち僧侶の掃除次第でありますが、皆様と共に時代を刻んでゆくものと存じます。

光勝院本尊造立にあたり、多くの皆様から浄財を頂戴いたしました。厚く御礼申し上げます。「光勝院本尊造立結縁浄財寄進御芳名」は、小誌二十六号に掲載いたします。ご了承のほどお願い申し上げます。

本年四月十九日に落慶供養法要が執り行われることとなっています。

施工の株式会社大林組様には、魔事なく工事を竣工されたことに感謝申し上げます。今後の維持管理にもご助力いただけることは心強いかぎりです。

（光勝院建設委員会事務局）

清水広元さんのこと

わたしが、中尊寺事務局出仕、本堂輪番付を拝命したのは、昭和六十三年（一九八八）五月一日のことでした。輪番というのは、わかりやすく言いますと、中尊寺本堂の統括責任者となるのでしょうか。当時の輪番は利生院の先代、菅野円融さん、清水広元さんと佐々木長生さんが輪番付、三人輪番付がいるというのは異例のことでした。おそらくは翌年への布石だったのでしょう。

その日の夕方、総本山比叡山延暦寺から分灯していただいた「不滅の法灯」の油を注ぎ足していた時に、灯籠の中の油皿から油をかなりこぼしてしまい、「初日でこれか……」と輪番さんへお詫びを申し上げに行きました。広元さんが後片付けを手伝ってくださり、

「誰にでもこういうことはあるのだから、そんなに落ち込むことはないよ」

と優しい声をかけられたことを鮮明に記憶しています。

その後も、広元さんの後を追いかけるように事業部の担当となり、天台陸奥仏教青年会では事務局長と事務局次長でタッグを組み、広元さんの後任の事務局長、副会長と彼の背中を見ながら歩んできました。

中尊寺は能楽を伝承しており、シテ方、ワキ方、狂言方、囃子方、諸役を僧侶がつとめます。広元さんは囃子の笛方で、春の御神事能「竹生島」では、わたしがシテ、広元さんが笛で二十回近く共演していたのだろうと思います。

几帳面な方でしたので五月四日は楽屋入りの時刻がほぼ決まっておられ、わたしが装束を着け始めると間もなく楽屋入り。ご指導いただいている佐々木宗生先生、多門先生に両手をつかれて、

「よろしくお願いいたします」

と挨拶されて囃子方の楽屋へと入って行かれていました。

ところが、昨年の五月四日、先生方に装束を着けていただいているのに広元さんが楽屋入りしない。わたしにとっては想定外のことで、

「えっ、これってどうしたの？」

と思っていますと、

「体調不良により、本日の舞台をつとめることができないそうです」

と連絡が入りました。想定外の2乗、

「何ごとがあったの？ 大丈夫なの？」

と、心やすからぬ思い。

翌五日に、総務執事から、

「非常に重く、生命に危険が及ぶ症状」

と告げられ、心は千々に乱れるばかりでした。

その七日後、広元さんは彼の岸辺へと旅立たれました。

一山住職が、先ずは「顔出し」といって弔問に行きました際に、観音院法嗣の清水秀法さんが、

「観音院住職であり、千手堂別當でございますので……」

と中尊寺貫首大僧正に言上し、「清浄観院」の院号を頂戴したのでした。『妙法蓮華經觀世音菩薩普門品』の偈文の一句「眞觀清淨觀」によるものと、観音経の偈文を読誦している方なら、皆様おわかりになることでしょう。

正月二日は中尊寺の「謡初め」です。終わって別室で一献傾けようとする、その前に、山田貫首が、

「広元さんが、今ここにいる。そう思って今日は盃を交わそう」

とおっしゃった、その場にいた誰しもが「身に入（し）む」一言でありました。

「清浄観院大僧都広元和尚」、安楽世界よりわたくしども中尊寺の中堅、若手をお見守りいただきたく存じます。

（北嶺澄照　薬樹王院住職）

〔福聚教会・中尊寺支部便り〕

祝いの年

三浦　みゆき

本年は、新天皇陛下のご即位があり、元号が平成から令和へと変わり、日本国中がお祝いムードに包まれた一年でした。

六月六日には、福聚教会東日本奉詠舞大会が、長野市若里市民文化ホールで行われました。詠唱の部三十七組、舞踊の部十六組、合わせて五十三組が参加しました。当支部も大会に向けて二月から稽古を始めました。四月からは、毎週火曜日に、佐々木仁秀先生・菅野宏紹先生にご指導いただきました。強弱をつけるところ、繰り返すところは二回目を大きな声で唱えること、撞木の使い方、片手合掌の形など細かいところまで教えていただきました。さらに、水曜日には皆で公民館に集まり詠唱・舞踊と、それぞれ先生方に注意されたところに気を付けて稽古に励みました。

大会では審査委員長の上野良明先生が講評・総評・お願いとしてお話をいただきました。

「詠讃道とは、所作に始まり、所作に終わる、といわれております。所作とは何のためにするのか、さばくとき慌てしない。ゆっくりすることによって呼吸を整え、さぁお唱えします！という気持ちになることです。所作が早いと、しっかりとした声を出すことができず、スーッと上の方から聞こえるだけで、後ろから聞こえてこない。お唱えするときは、後ろの人にまで聞かせるという気持ちでお唱えください」

とのことでした。

私たちはいつも稽古の時、先生方から

「始まる前、終わった後、舞台が暗くなっているときも審査員の先生方は見ているのだから、所作をしっかりするように」

と言われておりました。そして練習の時から、その辺のところは気を付けておりました。そのようなところも含めて、今回、詠唱の部において最優秀賞をいただけたのだと思います。

その晩のホテルの夕食の時は、まるでお祭りのような雰

叡山講福聚教会東日本奉詠舞大会（令和元年６月６日　長野市若里市民文化ホール）

囲気で、楽しく、うれしい時間を過ごしました。

今回、大会出場に際しまして、佐々木仁秀先生・菅野宏紹先生にはお忙しい中、ご指導いただきましたこと、心から御礼申し上げます。

後日、ホテル武蔵坊での盛大な祝勝会では、貫首様からお心のこもった色紙を会員一人一人に頂戴し、胸が一杯になりました。有り難うございました。

また、新築なった光勝院御本尊ご宝前での奉詠を十月二十七日に執り行いました。完成前は会員の皆様にはご不便、ご迷惑をおかけしておりましたが、ようやくこの日が参りました。光勝院の中はとても明るく、道場の中は木の香りがして、ぬくもりが感じられます。玄関から外を見たとき、正面奥に真っ赤に色づいたもみじの木がとてもきれいに見えました。

この一年は本当に祝いの年になりました。会員の皆様には健康に留意し、次年度もご協力を頂き、共に活動して参りたいと思います。

（願成就院寺婦・福聚教会中尊寺支部幹事）

新刊紹介

（二〇一九年一月～十二月）

〈書　籍〉

『大道　鎌倉時代の幹線道路』　吉川弘文館　著：岡　陽一郎　三・一

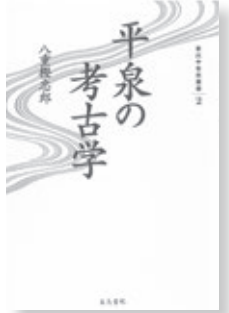
『国宝事典〈第四版〉』　便利堂　協力：文化庁　四・二十

『中尊寺領骨寺村絵図を読む　日本農村の原風景をもとめて』　高志書院　著：入間田　宣夫　十・十

『東北中世史叢書2　平泉の考古学』　高志書院　著：八重樫　忠郎　十一・二十五

〈報告書〉

『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第25集
平成28・30年度一関市内遺跡発掘調査報告書　建長の碑遺跡　猫館遺跡』　一関市教育委員会　三・二十二



『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集
骨寺村荘園遺跡確認調査報告書　平泉野遺跡・駒形45—4地点』　一関市教育委員会　三・二十二

『岩手県文化財調査報告書第155集　平泉遺跡群発掘調査報告書
柳之御所遺跡　—堀内部地区内容確認調査—』　岩手県教育委員会生涯学習文化財課　三・二十九

『平泉文化研究年報　第19号』　発行：「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会　編集：岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課　三・二十七

『岩手県平泉町文化財調査報告書第131集
特別史跡無量光院跡発掘調査報告書XV—第36次調査—』　平泉町教育委員会　三・三十一

『岩手県平泉町文化財調査報告書第132集　平泉遺跡群発掘調査報告書
伽羅之御所跡第26・27次　毛越Ⅳ遺跡第1次　西光寺跡第12次　志羅山遺跡第115次
中尊寺跡第85・87・88次　三日町Ⅲ遺跡第6次　無量光院跡第37・38次
毛越寺跡第19次』　平泉町教育委員会　三・三十一

特別史跡　無量光院跡

『岩手県南史談会研究紀要　第48集』

岩手県南史談会　十一・三十

（近代における平泉観光の成立と発展　―藤原祭りの成立まで―

論説：阿部　和夫　所収）

「国宝中尊寺金色堂修理委員会」委員名簿

委員長　濱島　正士
元文化財建造物保存技術協会理事長
文化財建造物保存技術協会顧問

委　員　室瀬　和美
日本工芸会副理事長

委　員　三浦　定俊
文化財虫菌害研究所理事長

委　員　窪寺　茂
元奈良文化財研究所建造物研究室長
建築装飾技術史研究所長

委　員　菅原　光聴
中尊寺事務局執事長

一枚の写真から〈2〉

北嶺澄照
（薬樹王院住職）

雪中の稚児

写真が撮影されたところは、中尊寺の支院の一つ、眞珠院の門前。十三人の稚児が並んでいます。よく見ると雪が積もっています。

なぜ中尊寺で、この時期に稚児行列が行われたのか調べました。

昭和二十五年（一九五〇）三月、奥州藤原氏四代の御遺体学術調査が実施されました。金色堂から本堂へ御遺体が遷座される際、稚児行列が行われたとのことでした。

この写真を自坊で見つけたとき、「これは」と一人だけすぐに誰かわかりました。向かって右から二人目、ニヤリと、何かイタズラを企んでいるような…。

このお稚児さん、小誌の編集長、H・S氏なのでした。

〔関山句嚢〕

〈第五十八回　平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉

（令和元年六月二十九日　於毛越寺）

（當日句入選）

梅雨空に舫ふ竜頭鷁首かな　（大会長賞）
＊櫂　未知子選　特選　一　関　鈴木道紫葉

むらさきの奥州街道梅雨の蝶　（毛越寺貫主賞）
特選　宮城県　佐藤　みね

三代の栄華を皺に蟇　（中尊寺貫首賞）
特選　一　関　村上　達男

おもむろに拾ふ弁慶の落し文
秀逸　盛　岡　鈴木　智子

老杉の洞の散銭梅雨寒し　（岩手県知事賞）
＊白濱一羊選　特選　盛　岡　桝田美知子

尺蠖の芭蕉の句碑をはばからず　（河北新報社賞）
特選　奥　州　鈴木　正子

蕉翁の英訳の句碑緑さす
秀逸　奥　州　小野寺テル子

平泉の日つるりと剥けた茹玉子　（平泉町議会議長賞）
＊渡辺誠一郎選　特選　奥　州　中村セイ子

梅雨の寺金の柱と丹の柱　（岩手日日新聞社賞）
特選　北　上　及川由美子

大池の立て石美しき蟇の声
秀逸　平　泉　旭　光

伏流のやうに経湧くあやめ寺　（平泉観光協会長賞）
＊照井　翠選　特選　一　関　桂田　一穂

透かし彫動くや梅雨の毛越寺　（河北新報社賞）
特選　奥　州　鎌倉　道彦

千年の水を飲みたるあやめかな　（岩手日日新聞社賞）
特選　大　崎　京極　久也

青葉風抜けゆく先の阿弥陀仏
秀逸　奥　州　小野寺正美

平泉の日秀衡椀にあんこ餅　（岩手日報社賞）
特選　奥　州　小野寺昭次

芭蕉句碑一字隠せる黒揚羽
秀逸　一　関　桂田　一穂

夏萩に風の道あり毛越寺　（岩手県議会議長賞）
＊小畑柚流選　特選　陸前高田　千葉　常子

紫は僧の保護色花あやめ　（岩手日報社賞）
特選　奥　州　岩渕　正力

風渡る青水無月の浄土庭　（中尊寺賞）
特選　平　泉　岩渕眞理子

供養会の僧の衣擦れ堂涼し
秀逸　奥　州　大石　文雄

旅人の言の葉紡ぐ梅雨の寺　（平泉町教育長賞）
＊小林輝子選　特選　奥　州　千田　勝子

いにしへの礎石を辿る蝸牛かな　（毛越寺賞）
特選　盛　岡　兼平　玲子

（応募句入選）

花に酌む父の知らざる世を生きて
＊櫂　未知子選（天）大　崎　只野　英子

平成に蒔いて令和の田植かな
（地）奥　州　青沼　利秋

仏蘭西に往きたく蝶を飼ひ馴らす
（人）長　崎　西　史紀

ゆるぎなき峡の一生や春田打
秀逸　豊　田　城山　悠水

でで虫の一歩測定不能かな
＊白濱一羊選（天）平　泉　北嶺　澄照

昼寝覚アリスの国の旅終わる
（地）遠　野　松本　良子

くりかへし名札をさはる入学児
（人）北　上　早川　羽山

ふるさとは一川一寺山ざくら
秀逸　一　関　森　正江

古代蓮咲いて寂光よみがへる
＊小畑柚流選（天）秋田　岩谷　塵外（じんがい）

蝶の舞浄土の庭を舞台とし
（地）一関　砂金（いさご）　文昭

植田はや色もつ風の毛越径
秀逸　平泉　岩渕　洋子

春蝉や耳朶のふくらむ磨崖仏
＊小林輝子選（天）盛岡　鈴木　睦子

招き浴ぶ初夏の香煙毛越寺
（地）奥州　吉田　貞子

通学の列整然と花は葉に
（人）遠野　松本　良子

緑さす光堂への切通し
秀逸　平泉　鈴木　信

背に腰に湧きくる力春田打つ
＊渡辺誠一郎選（天）奥州　小野寺敦子

ゆつくりと手をつなぎくる夕桜
（地）花巻　菅原砂登子

百畳の御堂を抜けて蝉しぐれ
秀逸　日野　関　明一（あきかず）

夏草を食ひ尽くしたる戦かな
＊照井　翠選（天）一関　石川　静江

蛍烏賊銀河の揺れるような湾
（地）奥州　加藤　次男

春耕の鍬に土塊（つちくれ）残し逝く
（人）一関　石川　静江

緑陰に象の化石の楸邨碑
佳作　奥州　岩渕　正力

（入選重複句は省き、秀逸は編者が適宜に掲出）

岩手県内　小・中学校の部　（投句総数一一八〇句）

勉強の疲れし窓に夏の雲
特選　一関市東山小学校　四年　佐藤　昊

カーネーション母に伝えるありがとう
特選　花巻市太田小学校　六年　藤原　麗葉

桜さく山一面に着かざって
特選　二戸市中央小学校　六年　荒木田佑弥

駅までの桜隧道（ずいどう）朝七時
特選　一関一高付属中学　三年　鈴木　悠太

スイカ割り大きな地球一撃す
特選　一関一高付属中学　三年　小原　佳剛

月見坂今も変わらぬ蝉の声
特選　奥州市江刺南中学　二年　及川　莉久

平泉小学校

ちゅうそんじじょうどのさくらほころびる
特選　四年　金田　綜

こいのぼり家族そろって風まかせ
特選　五年　菅原　彩名

月うさぎしだれ桜とおはなしを
特選　六年　佐藤　真鈴

長島小学校

白いくもパクパクたべるこいのぼり
特選　二年　今野　旺介

妹の手のひらいっぱい桜花
特選　四年　山平　幹太

かえる鳴く夜にみんなではいくよむ
特選　三年　小埜寺一華

平泉中学校

田植えまた顔に泥つき笑う母　特選　一年　千葉　迅人

真夜中のホタルが輝くカーニバル　特選　三年　宮田　風輝

春風を追いかけていく登校日　特選　一年　高橋　莉凰

（平成三十一年一月～令和元年十二月）

凍る手を岩にしまひぬ磨崖仏　『暖響』八月号　池田　義弘

赤子抱き雪の金色堂出づる　『草笛』二月号　稲玉　宇平

遣水に浮く葉しづむ葉もみぢ寺　『草笛』八月号　小野寺束子

頬にさす黴煌（かがや）けり磨崖仏　『草笛』八月号　千葉志津子

鳥帰る奥羽の嶺の風に乗り　『たばしね』初句会　鈴木　信

一坊の背山前山朴の花　『たばしね』六月号　菊池　幸介

霸王樹や奥の御寺の地獄繪図　『たばしね』六月号　岩渕眞理子

・霸王樹（仙人掌（サボテン））

御朱印に記す日付や開戦日　『たばしね』十二月号　北嶺　澄照

舍利塚の手水（ちょうず）を泳ぐ紅葉かな　『たばしね』十二月号

荘園の古地図のままに青田かな　『草笛』八月号　木村　利子

・経蔵別当領「骨寺村絵図」（重文）

光堂若水迎ふ灯の煌と　『草笛』八月号　岩渕　洋子

・岩手県俳句連盟賞「平泉若水送迎」より

秋草や時ゆつくりと光堂　『草笛』十二月号　内藤　照子

中尊寺訪へば粉雪舞ひはじむ　『日経俳壇』2／9　光（山口県）　髙山　公平

金色堂夕かなかなの其の中に　『河北俳壇』9／29　仙台　當摩さとこ

人日（じんじつ）やひとそれぞれの夢の跡　『たばしね』一月号　佐々木邦世

東稲山に細波作り鳥帰る　『たばしね』初句会　鈴木　信

料峭（りょうしょう）や慰霊供養の中尊寺　『たばしね』初句会　佐々木邦世

第五十九回　平泉芭蕉祭全国俳句大会

令和二年六月二十九日（月）

会場　中尊寺光勝院

特別選者・講師　長谷川　櫂　先生

（「古志」前主宰／朝日俳壇選者）

〔関山歌籠〕

（平成三十一年四月二十九日）

〈第四十回西行祭短歌大会〉

＊高貝　次郎選

放射線量測定機器の置かれある校庭に児らパスつなぎゆく
（中尊寺貫首賞）
一　関　松村　雅子

カーラジオの歌合戦聞き峠越え初詣でめざす竹駒神社
（平泉町長賞）
一　関　千葉　喜恵

亡き妻に背を支えられ生きている座椅子カバーは妻の手づくり
（平泉観光協会長賞）
一　関　鈴木　啓治

月見坂の杉の梢に韻きあり西行の声義経の笛
（岩手日報社賞）
紫波町　八重嶋　勲

人の世の縁かなしも義経堂春まだ寒き北国に建つ
（ＩＢＣ岩手放送賞）
奥　州　阿部スミ子

こめかみに当てたる指の銃身をしづかに外し除夜の鐘聞く
（岩手日日新聞社賞）
奥　州　岩渕　正力

佳作

『智恵子抄』読みて見上ぐる夕暮れの山上の空ほんとに青い
北　上　佐藤　怡當

料理人を目指す孫を育てんと越後三条の包丁贈る
一　関　小野寺ヨシ子

百寿まで手書きの賀状を賜りし恩師も逝きて年改まる
一　関　小野寺政賢

ふりそそぐ光のめぐみ与へたく急ぎ牡丹の雪囲い解く
北　上　佐藤　義男

紅き実に垂るる雫の煌めきてピアスにしたき庭の山茱萸
一　関　阿部　昭代

ピザを焼く子に送らむと大蒜の小さき球根植ゑて春待つ
一　関　岩渕　初代

自転車を漕げば緑にそまりゆく五月　岩手はひかりの器
盛　岡　清水　亞彦

わが古希を祝ひて子等の作りたるアルバムに笑む曾孫抱く亡母
宮城県　野口　良子

第四十一回　西行祭短歌大会
令和二年四月二十四日（金）
会場　中尊寺光勝院
特別選者・講師　今野　寿美　先生
（「りむと」短歌会編集人／神奈川新聞歌壇選者）

御神事能番組

令和元年五月四日

法楽
古実式三番

開口　佐々木五大　大鼓　三浦　章興
千葉　快俊　小鼓　佐々木亮王
菅野　澄円　笛　清水　秀法
破石　晋照　後見　菅原　光聴

祝詞

若女

老女

能

竹生島

後シテツレ　佐々木五大
前シテツレ　佐々木亮王
シテ　北嶺　澄照　太鼓　三浦　章興
ワキ　菅野　成寛　大鼓　千葉　快俊
ツレ　佐々木宥司　小鼓　佐々木仁秀
笛　清水　広元
間　破石　澄元

五月五日

開口　佐々木五大　笛　菅野　澄円
後見　菅原　光聴

半能

田村

シテ　佐々木五大　大鼓　千葉　快俊
ワキ　佐々木秀厚　小鼓　菅原　光聴
笛　菅野　澄円

秋の藤原まつり

中尊寺能

十一月三日

連吟　平泉　二葉きらり園　園児四十二名

鞍馬天狗

老松

仕舞　一関喜桜会

蝉丸　本澤　京子

芦刈　小川みどり

素謡　一関喜桜会

山姥

能

秀衡

シテツレ　佐々木亮王
シテ　佐々木五大　太鼓　三浦　章興
ワキ　佐々木秀厚　大鼓　千葉　快俊
ツレ　菅野　成寛　小鼓　菅原　光聴
佐々木宥司　笛　清水　秀法
間　破石　澄元

能「竹生島」間狂言「岩飛（いわとび）の舞」（令和元年５月４日）

〔陸奥教区宗務所報〕　第二部　中尊寺関係

平成三十年十二月一日〜令和元年十一月三十日

□ **平成三十年**

十二月五日　於大正大学
天台宗人権啓発公開講座　委員三浦章興参加

□ **平成三十一年**

三月十六日　於中尊寺
陸奥教区布教師養成所研修会
山内より十七名参加

四月十二日　於毛越寺
陸奥教区布教師会研修会　山内より五名参加

□ **令和元年**

六月三十日〜七月二日　於比叡山行院
天台宗教師安居会　瑠璃光院　菅野　康純

七月十四日〜十六日　於延暦寺
総本山駐在布教　瑠璃光院　菅野　康純

九月七日　二部檀信徒会一隅大会　於毛越寺
山内より僧侶一名檀徒九名参加
集まった浄財八九、〇〇〇円は地球救援募金へ

十一月九日　於毛越寺
天台宗祖師先徳大法会陸奥教区特別授戒会
山内より僧侶六名檀徒二十名参加

十一月二十七日　於天台宗務庁
天台宗人権啓発公開講座　委員三浦章興参加

十一月三十日
天台宗一斉托鉢　於中尊寺
山内より僧侶十名檀徒六名参加
集まった浄財一〇五、六一八円は地球救援募金へ

□ **役職任免**

（平成三十一年二月八日）
ハワイ州細井葬儀所に於いての特定布教
中尊寺　山田　俊和

（平成三十一年四月一日）
天台宗典編纂所編纂委員
圓乗院　佐々木邦世
天台宗典編纂所電子仏典員
瑠璃光院　菅野　康純

（平成三十一年四月五日）
天台宗国際平和宗教協力協会専門委員
金剛院（副）　破石　晋照

（令和元年十月一日）
陸奥教区宗務副所長
一隅を照らす運動陸奥教区本部副本部長
大徳院　菅原　光聴
一隅教区本部事務局長
利生院　菅野　宏紹
教区庶務主任・一隅事務局次長
眞珠院（副）　菅野　澄円
教区財務主任・一隅事務局員
円教院　千葉　快俊
教区教務主任・一隅事務局員
薬樹王院　北嶺　澄照
一隅教区本部理事　常住院寺婦　佐々木浩子
教区布教師養成所所長
中尊寺　山田　俊和
教区布教師養成所事務局長
瑠璃光院　菅野　康純
教区寺院問題対策委員
眞珠院　菅野　澄順
積善院　佐々木仁秀
寺院教会収入額教区審議委員
千養寺　佐々木秀厚
教区名誉住職推薦委員
瑠璃光院　菅野　康純

（令和元年十月九日）
教区地方選挙管理委員会予備委員
圓乗院（副）　佐々木五大
観音院　清水　秀法

（令和元年十月二十三日）
教区出版通信員　眞珠院（副）　菅野　澄円

□ **住職任命**

（平成三十一年四月三日）

常住院副住職　佐々木亮王

（令和元年六月十三日）

観音院住職　清水　秀法

□ **教師補任**

（平成三十一年一月二十七日）

僧都　常住院法嗣　佐々木亮王

□ **経歴行階履修**

（平成三十一年三月十日）

開壇伝法履修　地蔵院法嗣　佐々木圓了

（令和元年七月十三日）

円頓大戒履修　地蔵院法嗣　佐々木圓了

（令和元年十月五日）

法華大会廣学竪義履修　地蔵院法嗣　佐々木圓了

□ **遷化**

（令和元年五月十一日）

観音院住職　清水　広元（六十四歳）

□ **逝去**

（令和元年十一月五日）

大徳院寺庭婦人　佐々木より（九十二歳）

一隅を照らす運動全国一斉托鉢
陸奥教区　中尊寺（令和元年11月30日）

執務日誌抄

平成三十年十二月一日～　令和元年十一月三十日

平成三十年

◇十二月

一　日　月次（つきなみ）大般若（本堂）

二　日　北上川リバーカルチャーアソシエーション（以下、RCA）大館錦神社訪問（貫首、随行晋照）

三　日　平泉町交通安全運動推進町民大会（管財章興　於役場）

五　日　福聚教会陸奥地方本部詠唱・舞踊研修会開講式（総務澄円　於武蔵坊）

六　日　光勝院建設委員会

七　日　薬師会（讃衡蔵）

十　日　**光勝院上棟式**

十一日　初詣警備会議（管財五大　於泉橋庵）

十二日　東北プロモーションIN台湾（～十四日、総務晋照）

JA県産米「金色の風」奉納式（本堂）

中尊寺節分講中総会（執事長、法務　於泉橋庵）

十四日　金色堂調査（文化財建造物保存技術協会武藤正幸氏　管財）

弥陀会（讃衡蔵）

十六日　金色堂調査（～十七日、漆芸家・日本工芸会副理事長室瀬和美氏、京都造形大学岡田文男氏、東文研、文化庁ほか　管財）

骨寺村荘園米奉納

お経を読む会（観音ノ秀法）

岩渕善二氏瑞宝単光章受章祝賀会（法務宏紹　於武蔵坊）

十七日　白山会（本堂）

二十一日　光勝院建設委員会

二十四日　文殊会（経蔵）

二十八日　恒例御供餅つき

三十一日　午後三時　**一山総礼**

平成三十一年

◇一月

一　日　○時　**新年祈祷護摩供修行**

七時半　東山町〈若水送り〉着

九時半　正月祈祷護摩（本堂）

十時半　総礼

修正会　釈迦供（本堂）

冬堂籠り（～五日、結衆、開山堂）

二　日　九時半　正月祈祷護摩（本堂）

修正会　薬師供（峯薬師　讃衡蔵）

午後四時　謡初め（庫裡広間）

三　日　九時半　正月祈祷護摩（本堂）

修正会　山王供（山王堂）

十一時半　元三会　慈恵供（本堂）

四　日　修正会　熊野供（瑠璃光院薬師堂）

五　日　修正会　文殊供（経蔵）

大般若会（利生院弁財天堂）

六　日　修正会　釈迦供・月山供（釈迦堂）

寒修行（行者三名、町内托鉢。寒の入り～節分）

七　日　修正会　白山十一面供（本堂）

大般若会（本堂）

修正会　弥陀供（金色堂）

八日　修正会　薬師供（讃衡蔵）

一字金輪仏・千手観音法楽

修正会結願

午後一時半　恒例「**金盃披き**」

十一日　東日本大震災物故者追善回向　月命日法要（本堂）

十二日　第五十七回農林水産祭「むらづくり部門」天皇杯受賞祝賀会（本寺地区地域づくり推進協議会　執事長　於山王山温泉瑞泉郷）

十四日　**慈覚会**（御影供　本堂）

お経を読む会（貫首）

十七日　菅江真澄関連新資料記者発表（執事長　於平泉文化遺産センター）

二十一日　前貫首多田厚隆大僧正二十七回忌追善法要（本堂）

立正佼成会盛岡教会様・花巻教会様来山（貫首）

二十三日　ジャパンエキスポ・タイランド出向（～二十八日、総務晋照）

二十四日　平泉商工会新春講演会（参拝秀厚　於武蔵坊）

二十五日　天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）

光勝院建設委員会

二十六日　「平泉スピリット！」スピーチコンテスト（執事長　於平泉文化遺産センター）

二十七日　**文化財防火訓練**

二十九日　古都ひらいずみガイドの会新春講演会（執事長　於武蔵坊）

三十日　平泉観光協会理事会（執事長）

三十一日　一隅を照らす運動理事会（貫首　於宗務庁）

◇二月

一　日　月次大般若（本堂）

二　日　恒例**大節分会**（関取北勝富士関招く。歳男歳女六十四名、町内園児が豆を撒く）

三　日　節分会（日数心経　本堂）

四　日　平泉岩銀友の会新春講演会（総務秀法　於武蔵坊）

九　日　天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）

十一日　東日本大震災物故者追善回向　月命日法要（本堂）
十二日　旧国道四号線桜並木美化説明会（総務晋照　於朝田建設駐車場）
十四日　涅槃会御逮夜（本堂）
十五日　**涅槃会**（涅槃講式　本堂）
　　お経を読む会（大長寿院）
十六日　前天台宗ハワイ別院住職荒了寛師葬儀（～十九日、貫首　於ハワイ）
十九日　国宝中尊寺金色堂保存環境調査専門委員会（～二十日）

二十一日　平泉観光協会理事会（執事長）
　　大正大学教授加島勝氏来山（執事長、管財章興）
二十二日　光勝院建設委員会
　　天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）
二十五日　平泉町文化財調査委員会議（管財章興　於平泉文化遺産センター）
二十六日　インバウンド対策セミナー（総務晋照　於花巻なはんプラザ）
二十七日　平泉観光協会通常総会（執事長　於平泉商工会館）

◇三月

一　日　月次大般若（本堂）
　　岩手県観光協会賛助会員全員協議会（総務澄円　於ホテル東日本盛岡）
七　日
十一日　東日本大震災慰霊法要（貫首、執事長、金剛院、章興、随行秀法　於陸前高田市小友地蔵尊）
　　大震災物故者追善回向　祥月命日法要（本堂）
　　午後二時四十六分　発生時刻
十三日　打鐘・黙祷
　　平泉町世界遺産推進基金運営委員会（執事長　於平泉文化遺産センター）
十六日　布教師養成所研修会「布薩会について」（かんざん亭）
十八日　気仙沼市本吉冠者「高衡会」総会（執事長　於気仙沼市網元の宿磯村）
　　中尊寺菊まつり協賛会役員会（庫裡広間）
　　オープンファクトリー五感市講演会（参拝秀厚　於翁知屋）
十九日　**基衡公御月忌**（胎蔓供　本堂）
　　お経を読む会（円乗ノ五大）
　　中尊寺仏教文化研究所研修会「中尊寺経について」（講師：劉海宇岩手大学教授　庫裡広間）
二十日　**春期定例一山会議**

二十一日　春彼岸会法要（法華三昧　本堂）
　　野村万作・野村萬斎狂言の会（貫首、随行五大　於一関文化センター）
二十二日　光勝院建設委員会
二十三日　シンポジウム「中尊寺供養願文の謎を解く」（執事長ほか六名　於平泉文化遺産センター）
　　源義経公東下り行列保存会定期総会（法務宏紹　於滝沢魚店）
二十四日　開山会（護摩供　開山堂）
二十七日　平泉古事の森育成協議会（管財章興　於役場）
　　平泉町世界遺産地域協議会（執事長　於平泉文化遺産センター）
二十八日　東稲山さくらの会幹事会（管財五大　於役場）
　　故荒了寛大僧正追悼法要（参与秀圓　於寛永寺転法輪殿）
　　平泉町観光審議会（執事長　於役場）
　　平泉文化観光振興基金運営委員会（執事長　於役場）
　　天台宗海外伝道事業団臨時理事会（貫首　於上野両大師）
　　中尊寺薪能の会役員会（総務澄円　於役場）

◇四月

一　日　月次大般若（本堂）
　　平山郁夫絵画展（～十九日、本堂上段の間）
　　讃衡蔵運営委員会
四　日　御修法「熾盛光大法」（～十一日、貫首　於延暦寺）
　　源義経公東下り行列主要役者記者発表（執事長　於役場）
六　日　天台宗陸奥教区仏教青年会総会（執事長　於毛越寺）
八日　仏生会（本堂）
　　お経を読む会（積善院）
九日　鎌倉市教育委員会訪問（管財章興）
　　中尊寺ハス贈呈式（管財章興　於鎌倉市永福寺跡）
十日　「ドナルド・キーン　お別れの会日本の皆さんに感謝を込めて―鬼怒鳴門」（円乗院　於青山葬儀所）
　　東稲山さくらの会総会（管財五大　於役場）
十一日　平泉観光協会理事会（執事長）
十二日　天台宗陸奥教区布教師会総会（於毛越寺）
十四日　恒例花まつり子供大会
十五日　平泉をきれいにする会総会（管財　於役場）
　　春の藤原まつり交通警備会議（管財章興　於芭蕉館）
十八日　平泉・一関国際音楽祭実行委員会（総務晋照　於一関なのはなプラザ）
十九日　光勝院建設委員会
　　弁慶力餅競技保存会総会（参拝秀厚　於芭蕉館）

二十日　西行桜の森まつり植樹会（管財章興　於西行桜の森）
檀徒総代・世話人会総会（執事長、法務ほか　於武蔵坊）
二十一日　平泉消防団第五分団総会（管財章興　於北上市マース北上）
二十二日　天台宗陸奥教区寺庭婦人会総会（執事長　本堂）
二十五日　桜友会清掃奉仕（北参道）
天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）
平泉商工会青年部通常総会（五大　於武蔵坊）
二十六日　平泉菊花会総会（管財　於花みずき）
二十九日　第四十回**西行祭短歌大会**（講師　高貝次郎氏「現代歌人の歌から読み解く西行」）
三十日　「平成最後の日」特製御朱印授与（本坊守札所）

◇五月

一　日　**春の藤原まつり**開幕
藤原四代公追善法要（本堂）
稚児行列
「令和元年」特製御朱印授与（本坊守札所）
二　日　開山護摩供（開山堂）
天皇陛下御即位慶祝及び世界平和祈願法要（本堂）
三　日　源義経公東下り行列（秀衡公役は野田武則釜石市長）

郷土芸能奉演（衣川　川西念佛剣舞）

四　日　古実式三番　能「竹生島」

五　日　古実式三番
半能「田村」
六　日　山王講（山王堂）
九　日　ウェーサカ仏教会総会（法務宏紹　於一関松竹）
十　日　兵庫教区大塚善仁師ほか来山（利生院案内）
天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）
十一日　山内観音院住職
清水広元大僧都遷化

観光庁長官田端浩氏ほか来山
富岡八幡宮宮司丸山聡一様来山
十三日　JA県産米「金色の風」田植え安全祈願・豊作祈願法要（本堂）
十四日　平泉観光推進実行委員会総会（執事長　於役場）
中尊寺菊まつり協賛会総会（本堂上段の間）
十七日　観音院住職広元師葬儀（本堂）
四寺廻廊総会（総務澄円　於電通東日本仙台支店）
十八日　第二十二回仙台青葉能
「三輪神遊」狂言「末広がり」
「嵐山」
協力中尊寺（貫首、随行亮王　於仙台電力ホール）
お経を読む会（金剛ノ晋照）
二十三日　平泉商工会通常総会（執事長　於商工会館）
二十四日　光勝院建設委員会
日中友好宗教者懇話会総会（貫首　於東京）

二十六日　毛越寺曲水の宴（総務澄円　於毛越寺）
二十八日　一関地区交通安全協会通常総会（執事長　於ベリーノホテル一関）

◇六月

一　日　月次大般若（本堂）
四　日　**伝教会**（御影供　本堂）
九　日　**法華経一日頓写経会**（本堂）
十一日　平泉・一関国際音楽祭実行委員会（総務晋照　於一関なのはなプラザ）
一関警察官友の会総会（執事長　於いつくし園）
十三日　四寺廻廊法要（真珠院、執事長、法務ほか　於瑞巌寺）
十五日　第二十六回ふるさと平泉会総会（執事長　於浅草ビューホテル）
十七日　平泉芭蕉祭全国俳句大会実行委員会（執事長　於役場）
十八日　天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）
ウェーサカ祭典（法務宥司、総代世話人　於龍玉寺）
社会を明るくする運動平泉町推進委員会（執事長　於役場）
二十日　自在房蓮光忌法要（本堂）
群馬教区桐生部様団参（執事長案内）
二十一日　光勝院建設委員会
二十二日　天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）
二十四日　天台宗海外伝道事業団総会（貫首　於宗務庁）
二十六日　平泉観光協会理事会（執事長）
文化財虫菌害研究所理事長三浦定俊氏、東京文化財研究所来山
東山町二十五菩薩参拝（貫首、随行晋照）
平泉・一関国際音楽祭実行委員会（総務晋照　於一関なのはなプラザ）

二十九日　第五十八回**平泉芭蕉祭全国俳句大会**（於毛越寺）
講師・特別選者　櫂未知子氏
（講演記録　本紙掲載）
第二十回世界遺産講演会（管財章興　於平泉文化遺産センター）
平泉世界遺産の日

◇七月

一　日　月次大般若（本堂）
一隅を照らす運動理事会（貫首　於宗務庁）
平和の祈り（二老、執事長ほか　於旧観自在王院庭園）
四　日　青蓮院門跡門主東伏見慈晃師来山（貫首、執事長挨拶）
ウィーン・フィル奉納コンサート（本堂）
九　日　金色堂修理委員会（執事長、管財章興　於東京）
十　日　教育旅行誘致セミナーイン札幌（法務宏紹）
十三日　平泉水かけ神輿宵宮祭（円乗院　於旧観自在王院庭園）
富岡八幡宮神輿総代連合会様との交流会（執事長　於武蔵坊）
十四日　**平泉総社神輿渡御**
お経を読む会（法務宏紹）
十七日　北海道教育旅行誘致キャラバン（～二十日、総務秀法）
清衡公御月忌（胎曼供　本堂）
十八日　福聚教会中尊寺支部大会成績報告会（貫首、執事長ほか　於武蔵坊）
十九日　光勝院建設委員会
二十日　貫首　講話（「青空説法」於和賀多聞院伊澤家）
平泉総社神輿会「神酒開き」（法務宏紹　於泉橋庵）
二十一日　夏休み早朝坐禅会（本堂）
二十三日　弁慶力餅競技保存会研修会（参拝秀厚　於大沢温泉旅館）
二十七日　桜友会清掃奉仕（開山堂）
中尊寺寺子屋（みんなで作る茶会―日本の文化にふれる―　講師　八重樫貞子氏　庫裡広間）
北上川RCA理事会・総会・文化セミナー（貫首　於ベリーノホテル一関）
二十八日　中尊寺寺子屋（中尊寺ハスの開花観察　講師　阿部慶元氏　大池跡）
夏休み早朝坐禅会（本堂）
二十九日　天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）
三十日　岩手県雲南省事務所一行来山（総務晋照案内）

◇八月

一　日　月次大般若（本堂）
三　日　中尊寺寺子屋（中尊寺の大工さんと作る「組木」　講師　山田雪氏　かんざん亭）
四　日　夏休み早朝坐禅会（本堂）
天台宗世界平和祈願法要・比叡山宗教サミット三十二周年「世界平和の祈りの集い」（貫首、随行晋照　於延暦寺）
午後三時半〈**平和の鐘**〉打鐘
六　日　伊達泰宗公・高見正明様（支倉遣欧使節団随行員子孫）ほか来山（仏文所長案内）
七　日　平泉大文字送り火警備会議（管財　於役場）
夏堂籠り（～十一日、結衆、開山堂）
十四日　第四十二回中尊寺薪能
狂言「昆布売」
能　「紅葉狩」
十五日　山崎理惠子氏、平和合作画制作（本堂前）
令和元年度平泉町成人式（執事長　於武蔵坊）
十六日　第五十五回**平泉大文字送り火**（雨のため延期。二十日に実施）
毛越寺浄土庭園法灯会（貫首　於毛越寺）
十九日　チューリッヒ大学シュミット氏来山（御遺体学術調査関係資料閲覧　管財）
玉川学園ハンドベル部奉納演奏（本堂）

二十日　観福寺施餓鬼会（真珠院、瑠璃光院、大徳院、観音院）
毛越寺施餓鬼会（利生院）
文化財多言語解説整備事業報告会（管財章興　於盛岡アイーナ）
二十一日　戸津説法（穴穂行弘師）聴聞（貫首　於大津市東南寺）
平泉町文化財調査委員会議（章興　於平泉文化遺産センター）
二十二日　平泉町花壇コンクール（管財五大）
光勝院建設委員会
二十三日　平泉町上下水道事業運営協議会（管財五大　於役場）
貫首　インタビュー（中外日報社）
施餓鬼会御逮夜（本堂）
二十四日　**大施餓鬼会・放生会**（本堂）
二十五日　蜂神社例大祭（総務澄円　於紫波町同神社）
二十六日　本堂東側発掘調査（石畳敷設に伴う調査　～九月六日）
三十一日　龍玉寺施餓鬼会（円教院）
仏教文化研究所研修国指定重要文化財　東川院蔵『木造観音菩薩坐像とその周辺』（於一関市博物館）

◇九月

一　日　月次大般若（本堂）
光勝院建設委員会

瀬見温泉亀割観音例祭（参拝秀厚　於最上町亀割観音堂）

三　日　**泰衡公御月忌**（金曼供　本堂）

四　日　天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）

七　日　平泉消防団第五分団研修旅行（～八日、管財章興　於青森下北方面）

天台宗陸奥教区第二部檀信徒会ミニ一隅会（執事長　於毛越寺）

八　日　北上川ＲＣＡ「藤原氏四代泰衡公終焉の地を訪ねる旅」（貫首、随行晋照　於大館市）

十四日　五郎沼薬師神社秋季例大祭（管財章興　於紫波町同神社）

十五日　第六十五回平泉町敬老会（法務宏紹　於平泉中学校体育館）

十七日　藤原経清公命日祭（法務宏紹　於奥州市江刺）

白符忌（本堂）

讃衡蔵運営委員会

十九日　赤堂稲荷例祭（護摩供）

二十日　光勝院建設委員会

二十三日　秋彼岸会法要（常行三昧　本堂）

お経を読む会（円教院）

二十六日　平泉町「ふるさと名物応援宣言」記念セレモニー（執事長　於平泉文化遺産センター）

中国建国七十周年記念式典（貫首　於中国大使館）

二十九日　中尊寺通りホコ天まつり開会式（参拝秀厚　於中尊寺通り）

◇十月

一　日　月次大般若（本堂）

第二十七回平泉町社会福祉大会（執事長　於武蔵坊）

二　日　慈眼会（本堂）

三　日　中尊寺菊まつり協賛会役員会・実行委員会（庫裡広間）

四　日　法華大会広学竪義参勤（貫首　於延暦寺）

平泉古事の森事業（管財五大　於奥州市）

五　日　月見坂車椅子体験会（主催平泉ユニバーサルデザイン観光推進会議）

ドイツシュパイツアー市一行来山（執事長挨拶）

六　日　富岡八幡宮神饌田抜穂祭（貫首　於平泉町花立神饌田）

八　日　平泉観光協会理事会（執事長）

酒田三十六人衆本間栄吉様来山

十　日　光勝院建設委員会

十四日　貫首　講演（随行晋照　大館市歴史まちづくりシンポジウム　於秋田職業能力開発短期大学校）

二十日　菊まつり開闢法要

お経を読む会（円乗院）

讃衡蔵運営委員会

二十三日　了翁禅師研究会一行来山（円乗院案内）

二十四日　貫首　対談（武田双雲氏　於最勝寺）

世界遺産登録十周年記念事業実行委員会設立総会（執事長　於役場）

二十六日　紅葉銀河（参道の紅葉を照らす～十一月十日）

二十七日　**光勝院御本尊開眼法要**

光勝院建設委員会

三陸郷土芸能奉演（南三陸町伊里前獅子舞／大森創作太鼓）

二十八日　**秀衡公御月忌**（金曼供　本堂）

二十九日　日中韓仏教友好交流会議（～三十一日、貫首、随行晋照　於中国広州市）

三十一日　天台宗群馬教区北群馬部檀信徒会研修会様団参（瑠璃光院案内）

◇十一月

一　日　**秋の藤原まつり開幕**

藤原四代公追善法要

稚児行列

郷土芸能奉演（一関　行山流舞川鹿子躍）

二　日　菊供養会（本堂）

お経を読む会（貫首）

郷土芸能奉演（栗原　栗原神楽／江刺　行山流角懸鹿躍）

三　日　中尊寺能　「秀衡」

謡・仕舞（二葉きらり園、一関喜桜会奉納　能舞台）

伊藤園お茶振舞い（讃衡蔵前）

郷土芸能奉演（胆沢　行山流都鳥鹿踊／衣川　川西念佛剣舞）

五　日　一隅を照らす運動五十周年記念法要（貫首　於延暦寺）

山内大徳院佐々木ヨリ様逝去

六　日　表千家同門会お茶会（～七日、光勝院）

七　日　表千家御家元供茶式（光勝院）

八　日　オープンファクトリー五感市オープニングセレモニー（参拝秀厚　於平泉文化遺産センター）

九日　陸奥教区特別授戒会（戒和上大樹孝啓探題大僧正　於毛越寺）

十日　故荒了寛師一周忌法要及び荒了周師晋山式（～十五日、貫首　於天台宗ハワイ別院）

写経奉納式（本堂）

光勝院内見会（檀信徒・御寄進者）

十三日　大池跡発掘調査報告会

十四日　岩手県観光誘客説明会（～十六日、総務澄円　於大阪）

十五日　菊まつり表彰式（光勝院）

十八日　中国俘虜殉難者慰霊法要（貫首　於東京一乗院）

十九日　中国仏教協会様来山（貫首、執事長、総務晋照　応接・案内）

二十三日　天台会御逮夜（本堂）

二十四日　**天台会**（御影供　本堂）

二十五日　一関文化祭菊花展表彰式（管財五大　於一関文化センター）

二十七日　貫首　講話（於一関警察署）

二十九日　輪王寺門跡神田秀順大僧正葬儀（貫首　於寛永寺輪王殿）

昨年九月の台風十五号及び十九号をはじめ、数々の自然災害により犠牲となられた方々に対し、心からお悔やみを申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

関山中尊寺

梵鐘（岩手県指定有形文化財）

梵鐘とは寺院のつり鐘のこと。

この梵鐘には、建武4年（1337）の火災によって、多くの堂塔が焼失したという内容の銘文があり、奥州藤原氏滅亡後の中尊寺の歴史を知る上で貴重な資料となっている。

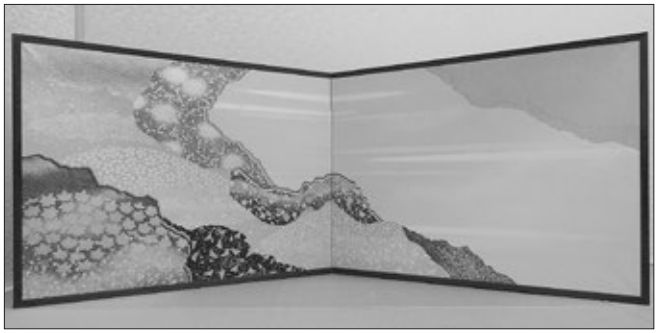
大晦日の「除夜の鐘」としても何度か全国に放送された名鐘である。しかし、材質の純度が高かったのであろうか、撞座は窪んでしまっており、今この鐘が撞かれることはほとんどない。

御奉納者　御芳名

平成三十年十二月～令和二年一月

一　風炉先屏風　一帖

東京都世田谷区　川口恵美子様



1964年東京五輪に合わせるようにホテルオークラが建設された折、縣治朗氏が壁画を作成されました。縣氏にその技法を学ばれた川口様のご尊父、表具師の吉田吟二様作の風炉先屏風。

浄財御奉納者　御芳名

平成三十年十二月～令和元年十一月

金色の風栽培研究会様　十万円

海鋒　守様　三万円

㈱えさしわいわいネット　菊池正仁様　三万円

白金運輸㈱　海鋒徹哉様　五万円

㈲平泉観光写真社様　十万円

立正佼成会盛岡教会様　三万円

立正佼成会花巻教会様　三万円

大正大学様　三万円

髙橋正次様　五万円

富岡八幡宮　宮司　丸山聡一様　五万円

金色の風栽培研究会様　十万円

常住寺様　五万円

正法寺　盛田正孝様　三万円

佐藤芙蓉様　四万円

立石寺様　三万円

㈲千葉恵製菓　代表取締役　千葉正利様　十万円

喜桜会々主　佐々木宗生様　三万円

最勝寺	山田泰枝様	五万円
青蓮院様		十万円
和賀地区自治協議会様		七万円
平泉・一関国際音楽祭実行委員会様		十万円
千葉宗裕様		三万円
東武トップツアーズ㈱様		三万円
浄土宗	岩手教区教務所様	五万円
原	和子様	五万円
釜石市芸術文化協会様		三万円
明鏡寺様		三万円
表千家同門会様		六十万円
妙法寺様		三万円
正蓮寺	大塩孝信様	三万円
一乗院	内山堯邦様	五万円
上村正剛様		三万円
一隅を照らす運動陸奥教区本部様		三万円

（順不同）

不動尊篤信御奉納者　御芳名

平成三十年十二月～令和元年十一月

青森市	佐々木幸子様	十六万円
中野区	中村武司様	十二万円
金ケ崎町	㈱板宮建設　板宮一善様	七万円
平泉町	㈱北都高速運輸倉庫東北　小野寺勝彦様	六万円
和泉市	辻林正博様	六万円
一関市	㈲豊隆軌道代表取締役　千葉美樹様	五万五千円
秋田市	木村英夫様	五万二千円
いわき市	盛喜石油㈱代表取締役　鈴木禮子様	五万円
銚子市	㈱イクオリティー　石毛裕之様	四万円
仙台市	志賀茂伸様	三万五千円
一関市	㈲豊隆軌道会長　千葉幸八様	三万五千円
新宿区	㈲シー・エヌ・エス　中村武司様	三万五千円
一関市	橋本晋栄様	三万五千円
豊橋市	渡邉良弘様	三万五千円
一関市	㈱アーク様	三万円
平泉町	㈱フタバ平泉様	三万円
一関市	㈱東北鉄興社様	三万円

宮城県美里町	熱海　章様	三万円
登米市	阿部武衛様	三万円
仙台市	㈱橋場総設　泉　笑子様	三万円
平泉町	一関信用金庫平泉支店様	三万円
一関市	及川元一様	三万円
栗原市	㈲金成工務店様	三万円
仙北市	熊谷　剛様	三万円
奥州市	佐藤恵一様	三万円
一関市	山平様	三万円
一関市	割烹炉ばた一八　渋谷正幸様	三万円
塩釜市	庄内千恵様	三万円
一関市	㈱精茶百年本舗様　衡年茶一、二〇〇個	三万円
一関市	東北建工企業㈱　今野幸宏様	三万円
一関市	橋本友厚様	三万円
宮城県南三陸町	山口　昇様	三万円
大館市	北秋生コン㈱　加賀谷正子様	季毎御供物
平泉町	岩間智子様	季毎御供物
青森県南部町	工銀青果　工藤一男様	季毎御供物
大仙市	㈲ベル美容室　高橋紀美世様	季毎御供物
五所川原市	坂本秀美様	季毎御供物
弘前市	笹　隆治様	季毎御供物
新潟市	松原晴樹様	季毎御供物
仙台市	沼田とも子様	季毎御供物
小樽市	村口初男様	季毎御供物
黒石市	㈲池田不動産　池田陸奥男様	季毎御供物
平川市	長尾智子様	季毎御供物
和泉市	辻林正博様	季毎御供物
豊橋市	渡邉良弘様	季毎御供物
青森市	唐牛正治様	季毎御供物
水戸市	つくし　藤枝恵枝子様	季毎御供物
二戸市	㈲岩食商事　米沢　励様	季毎御供物
富良野市	野村農園　野村　隆様	季毎御供物
金ケ崎町	有住安美様	季毎御供物
一関市	㈱ウィッキーインターナショナル様	季毎御供物
一関市	㈲酒井瓦工業様	季毎御供物
高崎市	だるまのふるさと　大門屋様　金色ダルマ（特大）二体	（順不同）

大節分会

２月３日の節分に近い日曜日に執り行われる。

本堂で厄除け、開運、招福を祈願する護摩が焚かれる。参列した大相撲の関取、厄年の善男善女等は護摩祈祷が終わった後、堂外へ出て「福は内、鬼は外」と声も高らかに豆を撒き、境内は終日賑わう。

ご祈祷（きとう）・ご回向（えこう）のご案内

□　当山祈祷道場不動堂にて祈祷勤修いたします。不動明王御宝前にてご祈祷後、お札とお供物をお授けします。志納金は一願五千円よりお申し込みいただけます。

例　厄除開運　家内安全　當病平癒　商売繁昌　良縁成就
　　交通安全　学業成就　身体健全　受験合格　心願成就　等

□　本堂ご本尊丈六釈迦如来御宝前におきまして先祖供養、水子供養、東日本大震災物故者供養を勤修いたします。ご供養の証（あかし）として「追善殖福証（ついぜんしょくふくしょう）」をお渡し（不要の方は当山にて奉納）いたします。志納金は一件三千円より。

例　○○家先祖代々供養　○○○○居士（大姉）供養
　　○○家水子供養　東日本大震災物故者供養　等

※ご来山申込みが難しい方は、ファックス等でもお申込みいただけます。
※ご不明の点は、中尊寺事務局法務部までお問い合わせください。

TEL　〇一九一（四六）二二一一
FAX　〇一九一（四六）二二一六

ご祈祷札

殖福証

後記

▽　中尊寺では元日から八日まで、修正会（正月に修する法要）が執り行われます。山内の諸堂を会場として諸尊仏に面座して牛玉宝印（本尊の種字が刻された木製の印）を加持し、天下泰平、万民豊楽、五穀豊穣が祈願されます。八日の午後、その結願を祝って「金盃披」が執り行われます。その席上に於いて、山田俊和貫首は四月末日をもって退任されるご意向を示されました。中興第二十八世貫首として十三年四カ月にわたり、中尊寺の法灯護持、平泉の世界文化遺産登録、東日本大震災物故者の追悼、復興支援に取り組んでこられました。巻頭言、ご覧ください。

▽　昨年のラグビーワールドカップ、何度も聞いた「ノーサイド」の言葉。「試合が終われば、自分のチーム、相手チームの区別なく同じ仲間」という意味なのでしょう。世の中を見渡してみるとき、この言葉に心を動かされたのは私に限らず、数多くいらっしゃるのだろうと感じました。

▽　発行が遅くなったことは、ひとえに編集者の力量不足によるものです。各位に深くお詫び申し上げます。

▽　小誌にご寄稿いただいた皆様、お力添えいただいた方々に厚く御礼申し上げます。

（北嶺澄照）

寺報『関山』は、中尊寺ホームページで閲覧が可能です。ぜひご利用下さい（http://www.chusonji.or.jp/）。

中尊寺〈寺報〉『関山』第二十五号
令和二年（二〇二〇）二月二十五日
発行　中尊寺（執事長　菅原光聴）
〒〇二九―四一九五
岩手県平泉町字衣関二〇二
編集　中尊寺仏教文化研究所
印刷　川嶋印刷㈱

地元園児による「謡」（11月3日）
平泉二葉きらり園の園児42名元気よく。

〈発行　中尊寺〉